

平成・阿蘭陀風説書

谷本 潤

目次

平成・阿蘭陀風説書

序

オランダの台湾統治

到着初日

間奏史話

大型スーパーがない

博士研究の彼我の距離

オリンピックでの韓国大躍進と近づいた 8 月 15 日

小包（創作）

洪水とワークシェアリング

オランダのはじまり

幕末のオランダ留学

エラスムス

信用について

スピノザ

ことばのハナシ

英蘭戦争

Transference 夏の欧州ー冬の湘南ーそしてまた夏の欧州にて（創作）

跋

序

徳川期、幕府は出島のオランダ商館長に海外事情に関する報告書を提出させていた。カピタンが口述したものをオランダ通事筆記し合本したものが、所謂〔ルビ〕いわゆる、阿蘭陀風説書〔ルビ〕オランダふうせつがきである。鎖国を完成させた家光の時代から継続的に呈上されていた。幕末期になると列強のアジア蚕食に無関心でいられなくなった幕府当局は、アヘン戦争の顛末を従来の『風説書』とは分けて報告するように求め、以降、『別段風説書』が不定期に提出されるようになる。こちらは、バタビア（いまのジャカルタ）にあったオランダ領東インド政庁が本国から送られてくる情報やらシンガポールや広東で発行されていた英字紙をソースに適当に見つくるって作成したものだと考えられている。テキトーと書いたけれど、1849（嘉永2）年の記事には前年に起きたフランス2月革命が、1851（嘉永4）年には太平天国の乱、1853（嘉永6）年にはナポレオン三世の登位、1854（安政元）年には欧州世界を丸ごと巻き込んだクリミア戦争が詳述されていて、ほぼ半年遅れで正確な世界情勢が報じられていたことがわかる。当時の通信事情を考えると、旧聞どころか文字通りの Hot News が届けられていたわけだ。よく知られるように、1853（嘉永6）年のペルリの（来寇と記したいところだが）来航は、前年の嘉永5年『別段風説書』に報じられていて、事前に幕府閣老は連中の来航意図など委細を知っていたことになる。そのわりには、誠にお粗末な応接であった。一昨年あった尖閣の国辱モノの悲劇（いやほとんど喜劇か）を引くまでもなく、これも、言ってしまうえば、日本の政治中枢にいる連中が無能でだらしない点において、今昔まるで変わってないというほんの一コマに過ぎない。

閑話休題〔ルビ〕あだしごとはさておき、今夏、オランダはアイントフォーフェン工科大学（TUE）で2ヶ月の在外研究の機会を得た。以下、その紀行顛末をまた性懲りもなく縷述しようと思う。一昨年の豪州に引き続いて、今度も2国間交流事業（オランダ科学研究機構（NWO）と日本学術振興会（JSPS））のファンドによる滞在だ。ホストは建築物理学の国際学会 International Building Performance Association とその国際会議 Building Simulation**で懇意にしている Jan Hensen 教授である。二年の逼塞を経、ようやくまた海外へ出かけることかなう——感謝にたえない。日頃の渋面うってかわって完爾〔ルビ〕かんじ）とした面持ちで、足取りも軽く、灼熱の故山を飛び立つ。庶人は庶人、執政者は執政者でもって、各層無責任の行き着いた果てのはて、今年も電力事情逼迫につき計画停電だそうだ。冷房も焚けぬ蒸暑の夏を皆さんどう乗り切るのか・・・しばし、窓から瞰下する真夏の日本を忘れることにしよう——蓋〔ルビ〕けだ）し、欧州の空と大地はあくまで冷涼で蒼〔ルビ〕あお）かろう。

わが風説書は、オランダ人がオランダを通じてみた世界情勢を当時の日本要路の人士に伝えんとしたものとした風説書とは、執筆動機も構成もまるで異なる（ついでにいうと格調も品位も異なる・・・どっちが高級かって？そんな野暮なことは訊かない・・・）。日本人がオランダを通じてみた世界の様子、そして日本をとりまく情勢を——現下の日本要路の人士に

伝えんとは思うけれど、聴いて貰えそうにないので——我が学生に伝えんと欲す。

オランダは、ほぼ九州くらいの広さに約 1600 万人が住する、地理的にも政治的にも西欧世界のど真ん中にある国である。国土は小さいが住人の図体は老若男女問わずデカイ。そして国は豊かである。昨今の欧州通貨危機でやや雲行きは怪しいけれど、落ち目の我が日本より一人当たり GDP も所得も、幸福度もなにもかも高く、自殺率は低い国である。私の最初の海外在住はオランダだった。遙か昔の大むかし、1990 年夏のことである。町中至る所に銀行——ついでに犬の糞——があるのが不思議でしょうがなかった。目に見える産業めいた産業があるわけでもないこの小さな国が、なにを方便（[ルビ] たつき）にしてこんなに豊かでいられるのか、対して、物的ストックは措くにしても目に見えぬクオリティを含めて考えると、どうして日本はあんなにも貧しいのか……滞在中、来る日も来る日も思案していた。殆ど戦慄するようなカルチャーショックであった。若かったからだろうと思う。往時と引き比べると、少しはものを知る年齢にはなったが、さだめて、青々とした感受性も失っているにちがいない。当時と同じような知的好奇心でもって周囲を視ることが出来るか、そのことも我が興味の底にある。爾来（[ルビ] じらい）、この国も変わったろうが、私も変わったろうから。

後のち述べることになると思うが、オランダは歴史的に見ると、かつて一度輝かしい栄華を見、転機を経、そして急激な衰退を迎えた。この盛衰のドラマは近世史にもあったし、ごく最近も同相のことが起きた。しかし、いずれの衰退の後にもまた昔日の活況を取り戻した頑強な国でもある。戦後史における転機と衰退には大きな自然災害が劃期をなした点も相俟って、バブル後失われた 20 年の挙げ句、震災に見舞われて今やヨレヨレの日本にとっては、合わせ鏡として景仰すべき国、学ぶべき邦（[ルビ] くに）だとする論があるようだ。皮相な、ほらぞろ日本はダメだ……隣んち（と云って随分遠いけれど）の方が余程マシだ論には与しないけれど、一片の真実もあるように思う。今度はそこをじっくり観、ゆっくり考えたいと思うている。

(Jul. 26.2012)

オランダの台湾統治

往路復路とも台北経由である。インフラ整備に対する国家戦略のなさの文脈から語られるが、成田でも関空でも日本のハブ空港はそう便利に出来てはいない。福岡に住んでいることもあるけれど、ソウル・インチョン空港、台北・桃園空港の方が遙かに便がよい。今度は桃園空港で数時間の待ちがあるが、施設の良さが幸いしてストレスを感じない。

やや唐突だが、台湾とオランダは縁（[ルビ] えにし）が深い。

殆ど知られていないけれど、オランダが台湾を植民地にしていた時期がある。台湾史でオランダ統治時代といえば、東インド会社が台湾島南部を制圧した 1624 年から、明末の動乱期に一種の亡命政権を台湾に立てた鄭成功（日本でもその昔ヒーローでしたね…彼の英雄的事業が近松により脚色されて『国性爺合戦』の人形浄瑠璃に仕立てられ大坂は竹本座で大当たりをとった）によって追い出される 1662 年までの 37 年間を指す。日本の朝鮮半島支配、彼らが諸悪の根源とおっしゃる所謂「日帝支配 36 年」とほぼ同じ長さだが、一般的歴史認識ではこのオランダの台湾統治を植民地支配だったとは観ていないようだ。当時としては植民間が短く、オランダ側が全島津々浦々を完全に掌握していたわけではないこと、また、その気になれば反攻も可能だったオランダがあっさり統治を諦めたあたりも、インドネシア植民ほど性根の据わったものでなかつと解釈されているのだろう。

鄭成功の亡命政府はその後、清に滅ぼされるが、台湾島への漢族の組織だった集団居住は実は彼の入台が最初であったといえる。もっと言うと、台湾に全島の支配機構が確立されたのはオランダ統治が最初である。要するにそれ以前は手付かずの無住の島だったわけだ。いくら共産党政権が台湾は大昔から漢民族が住む支配地域だった（だから台湾は我が領土である）といきり立って言ったとて、それはマヤカシであって、事実はおく最近のことなのである（連中のこういったレトリックは尖閣を巡る言明もそうだが根拠なきものが多い…昔からかの国では他人の女房であろうとたれであろうと街で美姫とみれば取り敢えず——我が妻女である——と言ってみるのが交渉ごとの常識だという——そこまでやれば口からデマカセも天晴れというもの…が、笑ってもおれない…理屈や道理は所詮、力の行使の前にはむなしなのだ）。それまでは、原住民に加え、福建や広東あたりからの居留民が細々暮らしている程度の、漢人にとってみると全くの塞外の地であった。

ポルトガル人により台湾が「発見」されるのは 16 世紀のことである。正確にはいつのことなのか諸説あつてはつきりしない。が、1544 年は下らなかつたことは確認されている。この、いわば「無主の島」のもつ貿易中継地としての価値に最初に気が付いたのはオランダ人であった。17 世紀初頭のことである。言うまでもなく、国を閉ざしつつあつた日本との独占的貿易を継続するための便に適つていたことが理由として大きい。その後、フィリピンのルソン島を拠点としていたスペイン人が台湾植民に乗り出そうとするが、オランダ人に阻まれている。

桃園空港は台北市内にある松山空港（最近、羽田から直通便が飛ぶようになって東京からの台湾行きが随分と便利になつた——訊くところによると日帰りの弾丸ツアーがあるらしい）からは車で 1 時間余の郊外にある。インチョン空港ほど設備は新しくはないが、台湾の National Flag Carrier の中華航空が本拠にする国際空港である。一度、真夜中の桃園に着いて松山まで移動、そこから朝立ち（別の意味に解しないように…そっちの方はすっかり減退して…もとい）の羽田経由で帰つたことがある。英語も通じず高速を 150 キロ超でぶっ飛ばす白タクには閉口したが、お陰でほんの 45 分でダウンタウンにある松山空港に着くことが出来た。運転は荒っぽいだが、この白タク、親切というのか、ちゃんとしていると

云うのか、領収書はあるか（白タクですよ）、と尋ねてくれたのには笑った。

どこの空港でも似たようなものだが、桃園のアーケードには土産物、両替屋、食い物屋、台湾らしいところでは足つぼマッサージ屋があって、人ひと人で溢れかえっている。そこらをそぞろ歩いている台湾の人（大陸からの金満観光客も多く、彼らを身なりだけから見分けるのは困難だ）に、台湾とオランダの関係について訊いたとして、どれくらいが上記の次第を知っているだろうか。「えっ、オランダと台湾？次の WBC の日本予選ラウンドで対戦でもあるのかい？」と聴き返されそうである（八百長騒ぎで大揺れしているが野球は台湾における最も人気のあるプロスポーツであり、熱が昂じて最近では巨人戦をテレビ中継しているらしい。一方のオランダは欧州最強の野球国——前回、WBC ではマイアミで行われた予選第 2 ラウンドまで勝ち進んだ——日本は不参加か……のニュースが巡ったのはつい先日のこと）。

(Jul.27.2012)

到着初日

アイントフォーフェン (Eindhoven) はオランダ第 5 の都市で、フィリップス社の本社のあることで有名だ。都市の起源は 13 世紀に遡る。が、先の大戦中の 1942 年、当時の戦略工業品である真空管（今で謂えば半導体か）を製造していたフィリップスの工場を破壊するため英国空軍が行った空爆（オイスター作戦）によって市街は灰燼に帰した。今のまちの多くは戦後復興による。オランダの南東部の端に近い（本当の南東部突端にはマーストリヒトが盲腸のようにドイツ側につきだしている）ので、アムステルダムにほど近いスキポール (Schiphol) 国際空港から遠いかと云えば、そうでもなく 15 分おきに便のあるインターシティ（快速）に乗れば、1 時間 20 分で着く。小さな国なのだ。

ここには、1990 年の滞在時には立ち寄らなかったが、2003 年に Hensen 教授が Chair となって開催された国際会議 BS2003 で来ているので、勝手知ったるとまでは言わぬが、おおよそまちのなりたちは記憶している。人口 20 万といっても、それはあたり一帯を掻き集めての数字だから、ざっとした感じでいえば、駅の規模は久留米程度、福岡の都市機能を 1/10 くらい加えて、一見しての人の密度としては大野城くらいと説明すれば、大間違いはない。大学が駅の裏口（入学とは関係ありません——ダウンタウンのある南口とは反対側との意味なり）すぐ前面にある感じも、大野城と似ている（大野城駅前にはわが総理工キャンパス——と云いはしてもこっちの方がゆったり広々しているけれど）。

アイントホーフフェン工科大学 (TUE) の創設はごく最近の 1956 年のことである。ナイエンローデ経営大学校なる私立大学ができたが、この国で大学といえば元々ある 14 の国立大学をさす（人口当たり国立大学数でみると日本と大差ないが、日本には他に多くの

公立大学、あたまの私立大学があるので、大衆化し果てた日本の大学から当地の大学事情を想像するのは大間違い)。オランダの大学といえばライデン大学の 1575 年創設が最も古い。デルフト、それにトゥウェンテとここにある工科大学は比較的新しい。よく知られるように、欧州では工学は学問とは見なされていなかったから、サイエンス——理学は別にして、従来の大学の枠組みの中には工学部はなかった。が、近代工業社会になって、そうも言うておられなくなって、急拵えした。作るにあたっては、既往の大学の外側に別個に設置した例が多い。

駅から荷物を引っぱって 5 分がとこ歩けば、すぐそこがキャンパスだ。Jan Hensen 教授が所属する建築物理・建築設備学部の建物は一番手前側にあつて、歩く手間が省ける。建物は外構を改修工事中だが、中にはアトリウムがあつて、なかなか凝った作りになっている。はいると閑散としている。それもその筈で、夏休みの真っ最中なのだ。先生も学生も大概はいない。Jan もいない。夏期休暇中なんで、わるいが委細は (Department——学部と言つてはいるが) 学科の事務職員と研究室の研究員が最初の世話をする段取りにしておくから——と言うことで、当方、それを承知できている。夏期休暇は相身互いだ。それにしても殆ど人影を見ない。オランダ人は勤勉で働き者と言われ、事実そうには違いないのだが、実際の労働時間は必ずしも多くはない。1990 年滞在時にも金曜午後は隔週で休みになる労働事情を垣間見て、心底驚いた。その意味は、これだけ働かなくて、なんでこんなに豊かなのかとの素朴な疑問である。諦観とともに行き着いた答えは、要するに日本がそれだけ貧しいと言うことに尽きる。establishment である連中に対して late comer たる我らがそのありようを不条理と見るなら、枠組み変更を迫るしかないが、それは当然彼らが諾とするところとならないから、最後は暴力の出る幕になる。そうしてみたところ、結局、コテンパンな目に遭つた我らには、いまのゲームのルールを受け入れるしかないのだ (日本破れソ連崩壊以降の現下、中国が西欧モダニズムへの挑戦者たるべき意図を隠さなくなっているようだが、どう推移するだろうか——たぶん連中の優位は容易には覆らないだろう)。翻つて言えば、資源もないし、モダニズムの波に乗って収奪した富の集積があるわけでもない本質的な意味での持たざる国である日本は、より長くより一所懸命働いてようやくと十人並みになってきたに過ぎないのだから、向後もいまの物質的繁栄をよしとするのなら、少なくとも対価当たり労苦は彼ら以上となることを甘受せざるを得ない。戦前戦後の外交で活躍した重光葵は、日本はアングロサクソンの許容する範囲内でしか生きていく路はないと看破した現実的政治家だったが、考えみれば当然だろう。彼らがオーナーであるゲームに参加させて頂いている日本が一人勝ちもしくは最終的な勝者になれる筈がない。日本では長時間労働はサービス残業の実態も含め悪いことのように喧伝されている。事実、労働契約に反するのだから悪いのだろう。ダラダラと職場にいるより、集中して仕事をすれば時短は可能だと言う論にもそれなりの合理はある。だから豊かになった日本は西欧並みの労働時間でよい、との説には私は全く与しない。なぜと云つて、まず、豊かになったという現状認識が正しくないし、そうした結果の当然の帰結としていま享受している物質的豊

穢さを幾ばくか諦める覚悟というのか、現下に比しての相対的貧窮を引き受ける構えがあって言っている論でないことは明らかであるからだ。卑近な喩えだが、朝 4 時前にオフィスにやって来、夕方 6 時までいる私の日常をダラダラやってないでメリハリ付けたらと言われれば、確かにそれはその通りだろうと思う。それだけオフィスにいても何やっているんだかわからないと云うのも当を得ている。能率的でないのも認めねばならない。だが、それを昼にのこのこやって来、夕方早々帰るあるいはそれなりに遅くまでいるのかも知れないが、少なくとも丸半日——12 時間いるとは思えない（たまに早起きが昂じて朝 1 時過ぎにやってくると誰もいない……まあ当然でしょうが）、かつ、大いに時間集約的にメリハリをつけていらっしゃるんだろう（そうです……いつもの嫌味です）けれど労働出力がそう大きいとも思えない我が学生たちには断じて言わせない。本当は、俺より勉強してないんだから、少なくとも俺より長くいて、勉強しているフリぐらいしろと襟首を掴んで強制したいところだが、そういうのをアカハラとかパワハラと言うらしいので堪えている。

はなしが逸れた。

Hensen 教授の研究室は主に 6 階にある。学科事務室も同じフロアにあって、事務職員であり学科共通の秘書業務をしている Renee（これフランス語なので殆ど発音は真似できない）に、私に宛がわれた部屋に案内して貰う。アトリウムに面したガラス張りの一室を自由に使ってくれと言う。そうこうしているうちに Hensen 教授の主宰する環境研究室のポスドク研究員 Daniel Costola 博士がやってきた。ブラジル出身で一昨年学位を取ったばかりだという。私のブラジル人イメージからはおよそかけ離れていて、若いが冷静沈毅そうな人である。東京工科大学の大場教授が受け入れで COE 研究員として 2 ヶ月の滞日経験があるらしい。彼自身の元々の専門は熱水分同時移動だが、現在は Jan の研究室の番頭役を任されていて、指導下の博士学生、修士学生が動かしているプロジェクト研究の大抵をみていると云う。日本のように各研究室に専任の教授、准教授、助教が配置されるシステム（もっとも人的資源の配置上、そんな前時代的なことが許されているのは旧帝大だけかも知れない）を取っていない欧米ではあたりまえのやり方だ。日本でも小さな国立大や私立大では同じやり方だが、この研究室の規模は随分と大きそうである。

殆ど人がいない中、偶々そこらにいた研究室の博士課程学生を紹介される。ゆったりと配置された机のレイアウト数からして 1/5 いるかいないかと云う程度か。香港出身カナダ人、インドネシア人、韓国人、イラン人とアジアからの留学生が多く、欧州組はオランダ人学生とイタリアからの女性ポスドクだけである。一般にアジア人が勤勉だから殆ど休業中にも不拘（[ルビ] かか）わらず出てきているという理由もあろうし、留学生がそもそも多いというのもあるのだろう。数人の顔に見覚えがある。昨年 11 月シドニーであった BS2011 でお会いしましたよ、と言われた。

Daniel に駆け足で下のフロアにある実験室やらを魅せて貰った。要所にプロジェクトの概要を説明するパネルが張ってある。プロジェクトのテーマは、知的生産性、昼光で制御するペリメータシステム、総合的ビルディングシミュレーション、手術室の気流性状解析

など等多岐に渡る。それだけ人がいて、多くのファンドを獲得し、そこからポスドク研究員の給与と博士学生への奨学金とを宛がっているということである。その活況たるや盛んなものである。しかし、時代の趨勢なのだろうか、この分野の研究は世界中どこでも似たようなことが行われていて、どれも応用アプリを強く意識したテーマ設定になっているようだ。そういったネタの社会需要が大きいのも理解出来る（どうしても世の中はすぐに役に立つこと、わかりやすい——visible なものを工学に求めるので）。些かも応用の重要さに疑義を挟もうとするものではないけれど、未知を拓くという「研究」という営みのそもそもの意義からして、日本でもここでも余所でも、建築環境工学にはサイエンス・エンジニアリングとして、もはや本質的にはやるべきことは残されてはいないのではないかと思えて仕方がない。ここをはじめ、それこそ先端を走っている世界中の数カ所の研究室に頑張っていて、あとのその他大勢——似たようなことをしていて、それでいてろくな成果が出ていない（たぶん英文ジャーナル論文の形態でその質と量が計量されるのだろう）ところはいつそ止めちまって、その分の人的物的資源を他に回した方が、少なくとも人類全体でみた研究という名の英知の前線を前に押し進めていくにはマシではないかと妄想する。実際には国の単位で科学技術振興は行われるから、そういった分野でも（学生に研究とは何物かを理解させるテンプレートとしての教育効果があることは間違いないので）、研究する経済的余裕のある国は大いにやればよく、斯く言うは大きなお世話というもの。GDP 比累積債務 200%を超え、人口を筆頭に全てが下り基調にある現在の日本は果たしてどうだろうか。廃業すべきだと言うならまずお前んところが最初だが、との批判承知の妄言でありますな……これ。

諸手続やネットワークなどは来週することにして、早々に大学を辞去する。アパートの契約やら買い出しなどしたら、もう夕方になってしまった。元々、人と異なる生活時間帯をもつことに加え、歳とともに著しく減退してきた時差ボケへの適応力のせいだろう、目が眩むような疲れを感じ、倒れこむように寝についた。そこまではよかったが、4時間して目が覚めてしまう。結局、ろくすっぽ睡眠が取れず一夜明け、土曜の朝になってしまった。

(Jul.28.2012)

間奏史話

慶長 5 (1600) 年 4 月 10 日。数日来ずっと続いていた春の大嵐が明け、豊後の国、臼杵の浜辺には朝から青空が広がっていた。

府内（現在の太田市）か、あるいは肥前の平戸へ廻ろうとでもしていたのか、3本マストの南蛮船が波打ち際むこうに座礁しているのを字（[ルビ] あざ）から集まった人々が見つけ騒ぎになった。マストに翻る旗は見慣れたポルトガルのそれではない。殆ど艦樓の

ようになっているがよく観ると、橙色、白に青の三色旗を横にした姿（[ルビ] なり）だ（現在の赤、白、青の三色旗は 1648 年のウェストファリア条約以降に国旗になったデザイン）。船尾の飾り板にはデウスさまとは違う異人像（これは後述するエラスムス像である）が掲げられている。あれは阿蘭陀船じゃと物知りの故老が言った。デ・リーフデ（「愛」の意味；リーフデ号）の漂着である。

リーフデ号は 300 トンほどのフリユート船だった。バルト海貿易によく使われた構造船で、船倉は樽のように大きく、密閉性が高い。何しろ北海の荒海にも大丈夫なように堅牢につくられていた。バルト海貿易は、ハンザ同盟はじめドイツ諸邦の商人（[ルビ] あきんど）たちとの競争に打ち勝って、オランダが海運国として商業覇権を確立する大きなきっかけになった。リーフデ号は 1598 年 6 月に僚船 4 隻（ホーブ（希望）号、ヘローフ（信仰）号；のち唯一ロッテルダムに帰還、トラウ（忠誠）号、ファライデ・ホーフスタッフ（吉兆）号）とともにロッテルダムを出帆。当初は南米を往復する予定であったが、曲折の末、南米からアジアへ回航することになった。が、マゼラン海峡を廻ったところで嵐にあった船団はちりぢりになって、太平洋を横断して極東にまでたどり着いたのはリーフデ号だけだった。当初乗り組んでいた 100 余名のうち、漂着時に生き残っていたのは 24 人だったという。中に、後々、日本の近世史に刻印されることになる二人の人物がいた。

英人ウイリアム・アダムスと蘭人ヤン・ヨーステンである。

両名はほどなく病死するヤコブ・タワケルナックに次ぐ乗組員のリーダー格だったのだろう。既に秀吉はいない。関ヶ原後、政権を完全に掌握することになる家康は、リーフデ号漂着の報に接し、ウイリアム・アダムスとヤン・ヨーステンを大坂に召致するよう命じた。イエズス会のポルトガル人宣教師たちは、リーフデ号は英人ドレイク（フランシス・ドレイク；カリブ海を中心に跳梁跋扈していた英国の官制海賊の頭目）と同心の海賊船にちがいないから、彼らはすぐにでも処刑すべきであると騒ぎ立てた。が、家康は黙殺する。リーフデ号に積載されていた最新の大砲銃器が彼の関心を引いたのだ。引見し、ただの水主（[ルビ] かこ）とは思えぬ両名の聡明さに意外の感を抱いた家康は、彼らから欧州世界の情勢を詳しく聴聞する。やがて、九州の大名とスペイン、ポルトガルとの間で寡占されていた貿易事業に英国とオランダとを割り込ませることで相互に競争させ、それを官制貿易にできないかと考えるようになった。英国、オランダ側にも同様の意図があることを両名は正しく認識していただろう。ポルトガル、スペイン（この時期のスペイン王フェリペ 2 世とその息 3 世はポルトガル王を兼ねている）との貿易には、政治将校のように宣教師が介在するが、日本の統治者としては、彼らの存在が目障りであった。キリスト教が社会的な不安定要因になることを死んだ秀吉同様、家康も気づきはじめていた。

彼らは新教国からやってきたが、このころのヨーロッパ人はカトリック教徒か新教徒かでまるで風貌が異なっていたのではないかと思われる。神との間にすら契約があり、かつ神秘主義的宗教観より、自己の勤勉さや自律心が現世の幸福をもたらすとの価値観は新教徒が共有する *Zeitgeist*（時代精神）であった。彼らの海外進出には、合理主義に裏打ちされ

た近代的な意味でのビジネスの雰囲気がかぐことが出来る。対して、宗教的使命感があったにしろ冒険主義を主な動機に新世界へと繰り出していったスペインやポルトガルには、略奪がまずあって、(少なくとも当初には) 植民地経営の概念が希薄であったように思われる。ビジネスと宗教は別物であり、自分たちの目的はあくまでビジネスである…なぜなら利をもたらすのは宗教でなくビジネスである、とのアダムスとヨーステンの謂いにも合理主義者の家康は安心もし満足もしたろう。

よく知られるように両名はやがて家康の外交通商顧問のような存在になる。やがて、アダムスが三浦按針、ヨーステンが耶楊子の和名を貰って幕臣となって帰化する。

アダムスの采地 ([ルビ] さいち ; 知行地のこと) が三浦半島の逸見のあたりにあったこと、ヤン・ヨーステンの屋敷跡がいまの東京駅八重洲口あたりにあり、それで付近を (ヤン・ヨース転じて) 八重洲とよぶようになったことは、よく人口に膾炙している。

ヨーステンはのち海難事故で不慮の死を遂げるが、アダムスは元和 6 (1620) 年に平戸で没する。家康死後の晩年は不遇であったという。私は帰化した彼らの子孫の家系がどう続いたのかに興味がある。『寛永諸家系図伝』もしくは『寛政重修諸家譜』を調べようと思いつつながら果たせずにいる。

400 年前にここから、身命を賭して水煙万里、遙か極東の異邦にまでやって来、遂にその地の土となって還らなかった人がいる。

教会の尖塔はここからは見えない。日曜のあさ、かすかに鐘の音が聞こえる。窓を開いてみれば、夜半にあった雨で街路は濡れているが、屋根で切り取られた空の一角は青かった。彼らが臼杵の浜辺でみた蒼穹 ([ルビ] そうきゅう) もこんな風であったろうかと埒もないことを思っている。

(Jul.29.2012)

三浦按針、耶楊子の家系は続かなかったようだ。『寛永諸家系図伝』、『寛政重修諸家譜』に耶の名字はない。相模の国の豪族である平氏の流れを汲む三浦の家は多くあるが、無論、これらに按針の家系はない。両資料には徳川氏からの新恩により幕臣に列した (つまり歴代将軍により新規に召し出された) 家系の記載もあり、中に三浦を名乗る数軒の家も見えるけれど、何れも按針の家系とは関係はない (系図を主とする諸家の由緒書史料だから初代がどこのたれだったか遡及できるわけだ)。為念、慶長から文化年間まで大名を含む幕臣で絶家した 880 余家の情報を網羅した史料『断家譜』を当たってみたが手掛かりはなかった。歴史にはもう一寸、ロマンチックな幻想が許されてもよそそうに思うのだが…現実には小説より奇なら「ず」。

大型スーパーがない

図々しいもので一週間もすると、はなからその住人だったような面（[ルビ] つら）して暮らしている。日本から持ってきたあれこれを自室でやっている自らに気がつくど、どこにいるんだかわからない気もするが、会議もなければどっからか電話や呼び出しが掛かってくるようなこともない。こんな具合の全きの自由時間というのは、今日的な日本の大学環境のもとでは、結局、自ら外に出掛けて拵えるよりほか享受しようがない。

ここでの生活に馴れてきたところで、まず気がついたこと。

90年の滞在時にはあまり生活実感がなかったのが記憶が薄いのだが、その後、米国と豪州で暮らした経験に比較すると、ここオランダでの人々の生活スタイルは、新世界流の消費文化からは明確に一線を画している感じがする。儉約を美德とする（どころか一般にケチな国民性だと認識されている）国柄であることや南のラテンの国々と合わせてみたときに軽々な一般化は慎重にすべきだろうが、こと人々の生活のありように関しては、西欧は新世界とは一面で明らかに異なる価値観を持しているようだ。

米豪では当たり前の大型のスーパーがここにはない。

生鮮食料品、乾物、食料品一切、日常雑貨、菓、さらには **dry goods**（衣料品）まで品揃えしてあって、安くもあり、便利でもあるから、日頃、物質主義を排し精神主義を奉じているような貌をしている私ですら、まわりにたれもない海外に住むといそいそと通いつめる。規模こそアメリカほどではないとはいえ、その種の大型小売店舗での薄利多売は、何事もアメリカに倣ってコピーするに余念ない日本でもごく一般的な流通小売業態だ。アメリカで言えば **King Soopers**、オーストラリアなら **IGA** のようなチェーンはあることはある。一番の大手が **ah** というスーパーで、ここアイントフォーフェンにも数カ所店舗を張っている。が、なにせ規模が小さい（郊外にはそれなりの大型店舗もあるけれど）。せいぜいコンビニを二回りほど大きくした感じだ。店舗の狭隘さによるのだろうけど、一通りの必需品はあるとはいっても、種類が圧倒的に少なく、商品バリエーションは貧寒としている。**OTC 薬**（**Over The Counter**；処方箋なしに買えるヤク）が売られてない（他店舗の **ah** にはありましたが棚一つ分——異国に行つてはご当地 **OTC 薬** を片っぱしから試しのみする、きき酒ならぬききヤクが趣味です——もっとも北京ではやりませんでしたけど）、総菜コーナーにみるべきものない、米豪だったらあるのにないものがあると云つた具合。必需品にあらざるものがなくなつてどうつてことはないのだが、買う買わないは別にして、そもそもの選択肢が広いだけでも楽しくなつてしまうのが、程度の差こそあれ、幾ばくか **materialism** に染まっているごく標準的な現代人ではないだろうか。アメリカ流の消費文化に毒された身——多くの日本人がそうだと思うが——には何か物足りない気がする——これが本当にスーパーかい——昔田舎にあったよろず屋の規模を 10 倍がとこ引き延ばした店屋に過ぎぬえじゃねえか。

野菜、果物やチーズ、ハム、鮮魚などは、毎週土曜に街の広場で開かれる青空市場 (**Markt**)

の方が安くて新鮮なので、みなそちらで買い付ける。何もかも一カ所で売ってくれたら便利で楽なのと思うが、それがあたり前であれば別に不都合と感ぜないだろう。考えてみれば日本でも私たちが子供時分までは、魚屋、八百屋、肉屋、豆腐屋といった小売店でそれぞれの買い物をしたものだ。酒屋、米屋にはご用聞きというのがあって、家まで配達するのがあたり前だった。でも今は違う。かつての魚屋はじめの各店屋は——よほどの田舎は別として——ことごとく淘汰されて久しい。

しかし、ここの人々はそんなスーパーのありようでも特段の不満は見せない。

戦後、政治教育文化にはじまり全ての面でアメリカ流を丸呑みしてきた日本人には想像しがたかろうが、西欧は、野放図で楽天的、言いようによっては小児的とも云えるアメリカ流の大衆デモクラシーや大衆文化、大量消費主義をよしとするアイデアに一定の距離を置いてきた。溢れ返る物に窒息しながら、それでも次なるモノを類ばらずにはおかないアメリカ流の物質主義に明らかに背を向けているのが西欧世界だといえる。

ここで俄然、西部邁のアメリカと西欧との政治風土の違いに関する言説を思い出す。

日本人がフランス革命のスローガンだと今なお無邪気に信じている自由、平等、博愛は、西欧世界では数百年間それへの信任と疑念が絶えず提起され続け、その結果として、所謂、西欧型民主主義は、一面で成熟した保守思想へと変容してきた。対して、自由、平等、博愛をみずからの存立原理に据え、原理主義的といえは聞こえはいいが、実態は兎も角として（自由と平等を標榜するアメリカだがその実は *invisible* な階級社会である）、理念としてのうたい文句を幼稚なまでに突き詰め、生な形で——そして異形な大衆デモクラシーにゆきついたのがアメリカだという。フランス革命のスローガンを建国まもない国の理念として掲げざるを得なかったのは、勿論、時代的同期性もあるのだろうけれど、歴史を持たぬ寄せ集めの人工国家（今もそうだろうが）として出発せざるを得なかったアメリカ合衆国の成り立ちにある。西部に言わせると、自らの歴史を捨てるようにしてアメリカニズムを丸ごと飲み込み、十分に咀嚼することもなしに *principle*——原理として恭しく捧げ持ち頭上高々と掲額してきたのが戦後の日本だという。戦前の悪しきことども一切と断絶するための右から左への急転回であった。そこには本当の意味での自省も深い自己分析のプロセスも省略されている。皇道主義、八紘一宇、大東亜共栄圏など等、その他一切切を消し去るには何もアメリカニズムでなくても——極端を言えばコミュニズムでもよかったのかも知れない——アメリカでなくソ連が戦後日本の宗主国だったら、丸呑みの宜しきを得て、東ドイツより模範的な衛星国だなんていわれていたかも知れない——勿論、8月15日以降数日を経て現れた進駐軍がソ連軍でなかったことが戦後日本にとってどれだけ大きな幸いであったかは言うまでもないが。——真の意味で、文明の成熟とは、「自由、平等、博愛」をジンテーゼとするなら、そのアンチテーゼたる「秩序、格差、敵対」との間の平衡にしかありえないことを、長い時間かけて習得してきたのが、西欧社会の政治システムであるという。

そう考えると、イラク戦争に対する英国をのぞく西欧各国の反応が腑に落ちるし、日本

の採った行動もむべなるかなと思われる。行動といえるほどの自律性が果たしてあったかは疑わしく、ブッシュの言うことを二つ返事で引き受けてきたのが小泉だったのではないか——と言って私は現下のアメリカ追従を難じているのではない——それしか日本の存立を担保する路はなかろうと思っている——ただし、それを承知で植民地ないしは保護国に甘んじているのと能天気丸呑みして思考停止しているのとではまるで意味が違う。

政治システムも大衆文化も何もかも、自分たちの分家が大繁栄の反面、大放蕩をしているのを鋭く見きわめ、つかず離れずの間合いを取りながら、醒めた目で観ているのが西欧世界なのだ。

アメリカ流大型スーパーが見あたらない理由の一端を以上の次第に求めるのは、あんまりな牽強附会だろうか。

(Aug.5.2012)

博士研究の彼我の距離

ここには週一月曜 11 時から **weekly meeting** というのがあって、これは事務連絡が主な内容だ。研究指導は月一のゼミで行われ、午前中は修士の学生、午後には **PhD** の学生が、その一ヶ月の進捗を発表し、**Jan** の質疑に晒されるという趣向。**PhD** 学生はさらに半年に一回の進捗チェックがあるという。学生指導の方法など、どこへ行ってもそう変わるものではない。

未だ夏休み期間中なので、先生も学生も入れ替わり立ち替わり、休んじゃ出、出ちゃ休んでと云った趣で、この状況が八月末まで続くのだという。誠に大らかなと云うのか、気が抜けているというのか、余所事ながらこんな仕事っぷりでいいんだろうかと思ってしまう。まあ、いいんでしょう。我らには望むべくもないが……。

オランダ人の **PhD** 学生は二人こきりで、そのうちの一人 **Mike** が来る 8 月 16 日の月ゼミに出席出来ないので（夏休みだそうで——恐れ入りました）、今日の週ミーティングでその分をさせて貰いますとメールでアナウンスがあったのがつい先週の水曜のこと。なんでもヒートアイランドをかじり始めたとのことで、是非、一番、稽古付けてやってつかーさいと **Jan** に言われたこともあって、私としても楽しみにしていた。以前に書いたが、**PhD** 学生の大抵は外部資金のプロジェクト対応になっている。ちょっと悪く言うと、知的好奇心に駆られて未知未踏の何事かに立ち向かうと言うより、社会の要請やら流行やら、そう云った外的条件に適応していくことで、何をするのかの過半が掣肘されている感じが強い。勿論、これは国の違いというより分野の違いに依拠する問題であり、日本でも建築環境工学や他の成熟した工学分野（有り体に言うと、もうハードコア・エンジニアリングとして本質的に為すべきことはなく、あるのはアプリ側の要請だけ——これを真正本質的な意味で

研究と言うかどうかは、私はなお疑問だと思っている)でもよく見かける情景である。何かのプロジェクト予算が付いたから(それが科学的に至当なミッションを掲げたプロジェクトであるなら別儀)、委託研究が入ったから、企業との共同研究をしなくてはならないからといった要請が、研究目的を生む、と云ってはあまりに酷か。

コメントを求められたが、う〜ん、正直なところ、一寸、困りました。

Mike の博士論文全体のテーマは「温暖化が建物室内環境に及ぼす影響について」と云うとてつもなく漠としたタイトルが冠されている(なに、うちの博士論文も人間-環境-社会システム云々と philosophical な、それでいてよく中身がわからない冠が付されていることが多いので余所様のことなど言えないがね)。今日の発表は二話構成で、前半が日射の直散分離の問題(全天日射量を直達成分と天空成分に分ける問題——そうしないと任意傾斜面に入射する日射フラックスが計算できないので)、後半がヒートアイランド強度についてなのだが、どちらも今ひとつだった(発表が、ではない——問題設定そのものが)。地理的因子で都心と郊外の温度差を統計的に予測する——その昔、地理学の分野でよくやられたヒートアイランド強度の問題にしる、直散分離の問題にしる、考究すべきことがまだ多く残されているとは思えない(ゼロではないだろうが、いきおいそれは重箱の隅つつきにならざるを得ない)。勿論、まだ途中経過なのだろうけれど、対象にしているロッテルダムの複数の観測ポイントの、例えば天空率やら周囲街区の建物平均高さや分布と云った都市の morphologic——形態学的なデータを調べているかと訊いたが否とのこと。都市高温化の因果をいいたいのなら、いくらキバったとて、所詮、統計的 black-box モデルではきちんとした答えは出てこないし、対象にしているロッテルダム以外への普遍的知見を抽出することは難しかろう。だからこそ都市気候学ではきちんと物理を踏んだロジカルなモデル研究が為されてきたのであって、そいつらを少し勉強してみちゃどうだねと言うと、実は、先生の AUSSSM Tool(研究室でだいぶ前に開発した都市気候と建築物理システムを完全連成系として扱ったモデル AUSSSM (Architecture – Urban – Soil Simultaneous Simulation Model) を英語版 Windows に準拠して作ったソフトウェア)ダウンロードして使ってみようと思ってるんですけど、あとでいじり方教えて下さい、と言うじゃありませんか。——なんだ何だ・・・また最後はおのれ自慢に繋げての与太バナシか、との読者の半畳が聴こえてきそうであります。いやいや・・・そうではなくて、言いたかったのは、言葉の壁という問題があるものだから研究(レベル、アプローチ法 etc)にも彼我に大きな違いがあるとの先入観を私たちは抱きがちだけれど、そんなことは全くなくて、分野の常識の違いの方が遙かに大きいということなのである。

そもそも研究には、演繹的アプローチが指向する法則定立的(nomothetic)アイデアと、調査や実験観測等の手続きにより事例を観察する個別記述的(idiographic)アイデアとがある。両者は科学の進歩にとって両輪であり、どちらが上等でより高級だとか、どちらがより重要であるかとの区別はナンセンスである。が、仮にどちらかのアプローチに立脚する研究営為があったとして、それはその一方のドメインに自閉自足したものであってよい筈はな

く、他方ドメインへの貢献やら連関を常に意識した試みでなければならないことは確言出来ると思う。建築環境工学ドメインの研究を観ていて、遺憾に思っているのは、現下行われている営みにはこの言明に合致したものが少なく、特に、後者のアプローチにあって、調査や実験観測等の結果をひたすら言挙げするに終始し、数学物理モデルに敷衍するための意図なり演繹指向なり、要するに普遍性を希求しようとの **aspiration** が非常に乏しいとの点なのである（無論、追及すべき普遍性なるものは既にあらたか明らかにされているとの本質的理由があるのだが）。某学会の俗称「黄表紙」といわれる論文誌の査読で感じるのは、膨大なデータを取り（中にはやらざるもがなのモノもある）、これだけ汗をかいたのだからいいでしょう然で平押ししてくる論文が実に多いこと。これでは真性の意味で科学研究とは言い難いと思うのだが、皆さんそれが常識の中で育って来、日常そこでだけ衣食しているものだから、何と申し上げても通じない。またぞろ、生意気言いやがってとの野次が一部の読者から飛んできそうだが、仮にそう云ったスタイルの論考を例えば PR*なり EPL などの純粋物理学におけるレター系一流誌に投稿してみるといい。In-house といって editor たちの判断によるスクリーニングにまず引っかかって、査読もして貰えないだろう（Nature、Science はじめ本当の一流誌は投稿したからと云って査読して貰えるものではない——7、8割は in-house で駄目出しされる）。曰く、喩（[ルビ] た）え正しいことを言明しているレポートであっても、科学的にオリジナルと認められる可能性のあるものしか本誌は掲載を検討しない…わるいけど他あたってくれるか——そりゃそうだわね。1+1 は 2 になるとか、日本はアジアにあるへーワ国家である、なんて唱えても科学的新規発見とはいえないもの。ご存じかも知れないが「黄表紙」とは、徳川中期以降に流行した草双紙のことをいう。品よく言えば、今の絵本、有り体は漫画本である（余計なことだが、我が研究室では漫画は発見次第焚書すると申し渡してある）。前記したそのある分野には**史なる歴史学のサブドメインも含まれる。なのに、権威あると自ら言っってはばかりぬ邦文論文誌をどうしてこんな変な俗称で称えて平気でいるのかわからない。内容はむかしの漫画本程度です——との謙遜かもしれない。

Building Physics は既に飽和していて、もうすべきことは幾らもないんじゃないかと思っている、と言うと、そうでもないさ…が、自分たちにもそう云う危機意識があって EU の委員会で練った今後目指すべき方向性をまとめたドキュメントがある…それ送るから読んでみてよ、と Jan は言う。

(Aug.7.2012)

オリンピックでの韓国大躍進と近づいた 8 月 15 日

豪州キャンベラで過ごした一昨夏も丁度同じ時期だったから、否が応でも 8 月 15 日前後

の現地の報道やら人々の反応、対しての日本のそれらが耳目に入ってきた（『入豪求法巡礼行紀』）。海外にいると日本及び日本人であることを一層意識する。国にいると朝日 NHK 以下の偏向報道不愉快なりと時期に差しかかるとあらゆるメディアを封鎖することがこのところの習い性になっているけれど、外地にいるとそうはいかくなる。しかし今度ばかりは、ここにいても耳目を塞いでいようと思う。自国の情けさなに、もうほとんど嫌気がさしたからだ。丁度、尖閣入寇があったごとく、今度は隣国元首の竹島入島さわぎがあった。

アパートのケーブルテレビは全部で 20 局ぐらい入っているだろうか。うちオランダ語の局は 6 割がとこで、あとは英語と隣国ドイツ語の局である。CNN 海外版も視聴できる。日本にいるときも観るテレビといえば日に 30 分程度の CNN 海外版だけだったが、観る時間帯が時差分（7 時間）ずれているのと、生活に余剰があるものだからそもそも見る時間が増えたこととも相俟って、**headline** 以外普段観たことがない番組を目にすることになる。一つ気がついた面白いことといえば海外企業の CM か。日本の CNN では現代やら KIA、サムソンなど、やたらと韓国企業の CM が多く、なるほど日本産業界の凋落と対蹠的な韓国産業界の隆盛もここまで極まったかと思っていたけれど、ここでは寧ろニコン、スズキなど日本企業の CM の方が多い。もっともサムソン以下韓国企業は既にここ欧州では充分ブランドを築いたのでことさら宣伝広告する必要がないとのことなのかも知れないが……。オリンピックは、オランダの局、英国、ドイツの局で日中ずっと中継をしている。当たり前だけれど、日本でのご関心とはおおよそ外れた、女子ホッケーだの（二人しかいないオランダ人 PhD 学生のかたわれ Peter クンは彼自身ホッケーの選手だったらしいのだが、彼の説明ではオランダ女子は強いらしい——実際、北京に続いてロンドンで二連覇となった——男子は銀メダル）、馬術だの視聴国での注目競技しか中継されない。故に、なでしこの躍進及び惜敗も見逃したし、男子サッカー（韓国と 3 位決定戦）の大敗もみずにも済んだ。中継はあったのかも知れないが、その時間帯（夕方から夜にかけて）はこちらでもテレビなんぞ観てない。

アメリカと中国のメダルの張り合いは措くとして、今次オリンピックでは韓国の躍進ぶりがめざましい。こっちのメディアもそれを伝えている。男子サッカー敗戦の翌日、日本のメディアでは、彼らの強いインセンティブは兵役免除からきていると報道していたが、負け犬の遠吠えは見苦しいので止めておくがよい。少し彼らの強化策の戦略でも見習ってはどうか。こちらの人々同様、日本人の多くが、現下の中国や北朝鮮、かつてのソ連およびその東欧衛星国の如く、オリンピックを単純な国威発揚のイベントとはみてないだろうけれど、それでも自国の活躍には心躍るし、わざわざ公金で選手を派遣している以上、負けるより勝つに越したことはない。今回総じて目立った日本の勝負弱さは、やはり国勢凋落の映し鏡かと思えば、慨嘆もするし気も阻喪する。

平日の昼食は Jan と PhD 学生たちとキャンパスに何カ所かある食堂に出掛ける。昼食と言ったって、この国の人々は温かい食事は夜一回こきりが普通だから、質素この上ない。私たちのいる建物にはないが、2 棟に一カ所くらいの割でカフェテリアがある。日替わり 2

種のスープとパン、サンドイッチ、果物、サラダなどが供されている。学生たちは自宅からパンを、気の利いた奴はハムやサラミを挟んだのを持参し、スープだけ取って喰うわけだ。スープだけならたったの46ユーロセント。わたしは大抵チーズとオリーブオイルを吹かせたライ麦パン2枚にスープの組み合わせにする。それでも1ユーロ26セント。まことに廉（[ヤス]）い。英語の語彙で **greasy spoon** ——安食堂（油まみれのスプーンもきちんと洗っていないような食堂との比喩から）と云うのがあるが、なかなかどうして、どこのカフェテリアも至って清潔で明るい雰囲気である。うち一カ所は私たちのいる棟屋から庭を挟んで向こう側の大学講堂にある。2003年Janが仕切った **Building Simulation 2003** の会場になった場所だ。頻りに国際会議が行われている。先週も磁性物理学に関する会議があつて、カフェテリア前の溜まりは丁度ポスターセッションの最中だった。比較的小さな学会のように見受けたが、オランダ、アメリカ、UKの次に多かったポスターが日本と韓国だった。ことによると韓国の方が多かったかも知れない。一人あたりGDPや所得ではまだ日韓に開きがあるように見えるが（彼らの）計算の仕方によっては日英に殆ど迫っているという数字もあるそうなので、**developed country** としての自信のあらわれなのか国名を取って **Korea** と書いてあるポスターが目立った。英語表記では **South Korea** か、つぼめて **S. Korea**、もしくは **ROK (Republic of Korea)** が普通だ。このような場面で分断時代の西ドイツの人が自国を **Germany** と唱えていたかどうかは寡聞にして知らぬが、これは民族統一の悲願のあらわれなのだと言うしおらしいものではなく、自分たちが朝鮮半島を代表している国だとのアクの強い表意だとみる方が彼らのメンタリティを言い得ているのではないだろうか。確かに北朝鮮はまともな国とは言い難いし、漢字表記で言えば、1910年の併合前の半島全体を統治していた国家は大韓帝国であり、名称上は大韓民国がそれを継承しているように見えなくもない。そもそも **Korea** は朝鮮もしくは韓の意味で半島全体の地域呼称だから、やはり韓国が **Korea** と称えるのは正確とは言い難いのだが、盛り上がっている連中に必也正名乎——必ずや名を正さんか、と言ったとて通じない。定着している地理呼称をわざわざ東海と呼び、自分で呼ばわっている分ならまだしも、世界中の皆も呼び名を変えてくれと仰る国柄だ（対して日本では東シナ海と呼ぶのはけしからんと相手から苦情を持ち込まれたのならまだしも、自ら率先して東中国海と言っている連中がいる珍しい国です——これは決して謙譲の美德というものではなく唯の阿諛追従にあらずして何ぞや——歴史文学に昏（[ルビ]くら）い私には中国を（地域呼称として定着していた）支那とよんで悪い道理も理解不能です）。韓国の人々は日本に対しては何を言っても、何をしても免罪されると思っているから、史的経過を辿れば自説に根拠がないことはわかっていながら、不法な実効支配続ける島に元首が乗り込んで死守する云々とパフォーマンスしても恬として恥じ入ることもないが、これと同じようなこと——名をたばかりやがては実をも取ろうとする権詐の振る舞い——を世界相手にやっついては真の意味で先進国とは認めて貰えないのじゃなかろうか。竹島について言えば、かの国のフツーの人は、独島は檀君開闢（[ルビ]かいびやく）以来、朝鮮民族の封土だったと教えられているのでご存じないけれど、本当は根拠

薄弱（下條正男『竹島は日韓どちらのものか』がよい入門書）なのを知るが故に既成事実化を急いでいるのだろうし、先般のロシア首相の北方領土訪問にも大して騒ぎはしなかった日本だから大丈夫だろう、ここは一つどこまでやれば日本が怒り出すのか瀬踏みしてやれ——とのことに相違あるまい。盗人して何が悪いと居直って大声する品性を描いておくなら、実に戦略的な外交ではないか。その十分の一でいいから真似して貰いたい。そういえば韓国では与党セリヌ党が国際司法裁判所に提訴するという日本政府を、盗っ人猛々しい、とおっしゃっているそうで——交通事故でたとえ自分に非があっても、お前がぶつけてきた、とまずカマしてみる流儀に倣って、盗人が被害者を（油断のあったお前が悪いというのならまだしも）ドロボー呼ばわりしているのに、唾然としているのならわかるが平然としている日本はどっかおかしくはないだろうか。盗まれたモノでも実質的所有が長きにわたれば、そのうち盗まれた人の言い分も時効により聞き入れて貰えなくなるのが法的慣習だ（国際法とてそうだ）。

当事国以外は極東の一島嶼などに関心ないだろうと思っていたけれど、領有権を巡って争っている島に韓国大統領が電撃上陸し、対して日本が大層怒っている——との事実関係だけだが、CNNもオランダのメディアも直ぐに伝えていた。大層怒ってなんていないでしょう——閣僚の間の抜けた発言は出るし、韓国国内では実兄がお縄になったレイムダック大統領がうったパフォーマンスとみる醒めた反応に過ぎない、とメディアは火消し論調にせっせといそしんでいるもの。相手にいかに非があり自らにどれだけ分があろうともそれを言わぬ、どころか自分の方から悪うございましたと言うことさえ敢えてする——こんな変態マゾ国家、日本を描いて他にありません。こう云うのを自虐という。高島俊男がどっかに書いていたが、本当はそんなの自虐とも言わない。「自虐」とは自らをいたぶることだから当然痛い。苦痛で顔もゆがみ心も軋んでいる筈だが、真の愛国心や責任感などおおよそ持ち合わせぬ執政の連中にしろ、高見にたった宣託を垂れて自ら木鐸と言っている人たちにしろ、大抵の日本人が実にケロツとしたモンじゃないか——人ごとなんでしょう。レ・ミゼラブル——頼むから、だれか何とかしてくれ。

くだんの上陸騒ぎは日本でいう終戦記念日が近いタイミングを狙って行われたとの観測もあるそう。さもありなん。やる以上は効果的なタイミングであるのが道理というもの。

そういえば先原爆忌に原爆投下を命じたトルーマン大統領（彼は副大統領だったにも不拘（[ルビ] かかわらず）ルーズベルトが死ぬまで原爆の存在をしらなかった）の孫に当たる人が（たぶんたれかが呼んだんでしょうけど）長崎にわざわざ行脚、その彼から「胸が張り裂けるような思いだ」との発言を引き出し、ナイーブな感傷に浸っているのが日本のおおよその雰囲気だった。CNNでもそのトルーマン氏の長崎入りを映像入りで伝えていたが、その直ぐあとにはエノラゲイ（広島に原爆投下したB-29）の搭乗員が映し出され（まだ存命の人がいるんでしょか）、あれがなかったら米兵の犠牲が更にどれだけ増えたかわからなかった、と発言させていた。文明に反する非人道兵器でもって非戦闘員を何十万人と殺戮しても戦争犯罪とはならないどころか正しいことだとおっしゃる。これ、致し方な

いです——当方、負けたんだから。

すぐさま暴力に訴えるか否かの違いはあっても、力が全てを決するのは当時も今も同じだ。力は全ての **power** を含む国力と言い直してもよい。あの戦争に負けたのは史実だ。が、このまま負け続けていいものだろうか。そのうち国の底が割れ、どうかなってしまうと危惧するが、大方の日本人はそうでもないようだ。だから、原爆に短絡させて、いまこそ原発を全廃せよなどと能天気なこと言っておられるのでしょう。

負け続けるって何のことかって？

またぞろ、右翼反動がとんでもないこと言おうとしてるんだらうなどとおっしゃちゃいけません。僕が言ったのはサッカー日韓戦のことです。

(Aug.10.2012)

小包 (創作)

アトリウム越しに見える公園通りはたいそうな人出だ。土曜のオフィスならたれもいないだろうから、仕事ははかどると考えたのが浅はかだった。この一週間、回転木馬やら、ミニジェットコースターのアトラクション、それにテキ屋のトレーラーが運び込まれていた公園通りは、昼前からストリートオルガンの音が鳴りやまない。今日から **Kermis**——移動遊園地の日だったと思い出しても今さら始まらない。とても原稿どころではない。男が深い溜息をついて、スタチオン——**Station** の見当に目をやると、まだら目に強い陽射しが落ちているダウンタウンの薨の向こうに教会の尖塔がみえた。青い天空が所々のぞき見えるが、白く、そしてこれもまた所々黒みがかかった厚い雲が拡がっている。フェルメールの「デルフトの眺望」に描かれていた雲そっくりだ。また夕方に日照雨 ([ルビ] そばえ) がよるのかも知れない。

どうした？溜息なんてついて——隣のブースの **Buno** が声を掛けてきた。いや、外が喧しくてとてもキーボードなんか叩いてられないよ——男がぼやくと、**Buno** は笑っている。

——あんた、ここを辞めるって？

香港系カナダ人の **Buno** は殆ど訛りのないアメリカ英語を話す。彼は 1984 年中英共同声明で香港の返還が決まった直後、両親とともに出国して以来、5 年と同じところにとどまったことがないらしい。大学はオクラホマでおえ、カナダ国籍が取れてから、バプテスト大学で修士を取りにいったん香港へ戻り、その後、東京の出版社に 4 年勤め、北京で 3 年働いたこともあるらしい。それから…は忘れたが、とにかく世界浪々の身だ。42 歳にして、オランダでフランス近世経済の博士課程有給学生をしているというのも珍妙だが、49 歳にしてポストク渡り奉公人をしている男も人のことを言えた義理でない。

——ああ、今度は海を渡ってスコットランドに行ってみようと思う。エジンバラで受け

入れてくれそうなので、今こうしてポートフォリオのエッセーを書いているところだ……でも、きょうは駄目だな。

——俺も、もし学位が取れたら次の落ち着き先を考えなきゃならぬ……Buno は呟いた。

——あんたみたいに賢くて、広東語、北京語、英語、フランス語にオランダ語と 5 カ国語を操る才人が、どうしてフラフラ彷徨い歩いている。国に帰ったらどうだ？

国って一体どこのことだ、と真顔で言うと、Buno は両手を広げ哀しそうな目をして笑った。自分も国を出て何年たつのだろう……男は思った。

>大っぴらには送れないものなので、リスクは覚悟で普通郵便の小包で送ります。これが最後になります——N 氏から来たメールで全てが明るみに出たことがわかった。いよいよ国が遠くにかすんでいくようだ。今さら嘆いてみてもどうなるものでもない。致し方なかったのだ。それにしても、どうして書留で送ってくれなかったのだ……かれこれ一ヶ月たつがまだ届かない。書留では税関で開けられる可能性があるらしいので、敢えて普通で送ると言ってよこしたが、届かなければどのみちで同じだ。男は N 氏の軽率を呪った——これでは次の落ち着き先に移ろうにも身動きが取れない。

今時期、黄昏時になってから暮れきるまでが長い。

男は Kermis を素通りして家賃 350 ユーロのぼろアパートに向かっている——途中、土曜青空 Markt でアスパラガスと鯖の薫製を買って帰ろう。

Kermis は家族連れでごった返していた。Kroket——コロッケの自販機、射的屋、綿菓子屋が続く中、右も左も家族連れの人波だ。

耳を聳するストリートオルガンの脇で女に声を掛けられた。

——Can you speak French?

こうやって外国人と見ると声を掛けてくるロマの物乞いや押し売りには大抵拘わらずに立ち去るのだが、男の行き足はそこで止まった。フランス訛りの英語が耳に心地よかったからか、先刻 Buno が言った——国って一体どこのことだ——が耳朶に残っていたかも知れない。彼らもまた流浪の民である。

——わたしの妹がブリュッセルに帰るのに切符をなくして困っているの。女は早口のフランス語で喋り始めると、振り返りざまコーヒーショップの屋台のかけで、こちらをじっと見ている少女を指さした。男は目を疑った。面差しがそっくりだったからだ。男は呆然として少女を見つめていた。褐色の膚をもつ彼らにはめずらしく白磁のような顔色をしている——滋養が悪いのだろうか。少女は黒目の大きな目でこちらをじっと見ていた。男には、直ぐ横で泣きバイカボン引きの前口上をあれこれ喋り立てている女の声が遠くにきこえた。

すまないが、自分には何もしてやれない……何も出来ないよ——男はフランス語で呟くと足早に彼女たちを後にした。おととい来やがれ——フランス語の汚い罵り言葉を背中が聴いた。

その夜——男は原稿書きに集中しようとするが、夕方の少女の面立ちが戻ってきて手につかない。

最後に逢ったのはいつだったろうか——煩惱が男の意識を食い荒らしていく。

そのとき杉戸の扉を遠慮がちに叩く音がした。

壊れた玄関ホールの鍵がそのままになっている安アパートだから、ホームレスが這入（[ルビ] はい）ってくることがあるのだ。出ないでいるとしまいに諦めるのだが、今夜のやつはいつまでも執拗だった。男が諦めて、鍵を開けて扉を半開きにすると、廊下の裸電球の薄明りを背景に小箱を抱えた初老の男が立っているのが見えた。戸を開けると、彼は酷いフランス訛りの英語で、男の名前を口にした。Oui——男が応じると、初老の男は、今度はフランス語で——自分は向かいの家の者だが、これ預かりものでさあ——と、脇に抱えていた箱を差し出した。N氏からの小包だ。向かいの者だと言うが見たことのない貌だ。本人不在の場合、隣人に荷物を預けられたり、預かったりしたことなど、これまでこの国で一度もなかったが、不思議なこともあるものだ。礼を言って受け取り、戸を閉めようとすると、初老の男は遠慮がちに言葉を継いだ——あの…あなた様はその大学の偉い先生で博士さまかどうかはありますが、折り入ってのお願いがあるんですさあ。うちのガキが急に具合が悪くなって、一寸ばかり診てやってもらえませんか。男が驚いて——自分は医者じゃない、ドクトルといっても経済学の博士だ、と言っても通じない。——それでも博士は博士でドクトルに違いはないんでしょう？だったらなんとかしてやってくだせえ——そんな無茶なこと言われても困る。具合が悪いのなら Willemstraat にある急患診療所に連れて行けばいいでしょう。初老の男は哀しげな目をしてかぶりを振った。——医者に診せる金がないから、こうしてあなた様に頼んでいるのでさあ…わたしたちには金もないが国もない…だから、保険なんてモンもないわけさあ。

根負けした男が向かいの家に請じ入れられると、調度品一つとない薄明りの中で横になっていたのは…あの少女だった。

昼間一緒だった女はいない。代わりに初老の男の細君と思わしき女が少女の額の汗をぬぐってやっている。

男はしばらく少女の顔を見つめていたが、意を決するように、手に持っていた小包をそっと初老の男に差し出した。

「…？」

「これをあなたたち親子にあげよう。あとで開けて中を見てみるといい」

いや、あつしたちは何もそんなつもりでこれを長く預かっていたわけじゃ——いや、いいんだ——男はそう言い残して、啞然としている夫婦をあとにそっときびすを返した。

これで諦めと決心がついた。自分も彼らや Buno と同じ流浪の民の一人に過ぎない——もうどこにも帰るところはないし、行くところもない。

男が逐電するように国元をあとにしたのは五年前のことだった。

(Aug.15.2012)

洪水とワークシェアリング

いまだ夏休みである。Jan は毎日出てきているが、学科の他のスタッフは休み中のもの多く、フロアにある学生の席は相変わらずまばらである。彼はわたしに家族を連れてどっかに出掛けないのか、週末はどこへ行ったかと訊くが、束の間、家人どもから解放されているのにわざわざ呼びつける阿呆はいないし、私にとっちゃここにいることがすなわち休んでいようなものである。月曜午前の研究室ミーティングも Jan 以下 PhD 学生、ポスドクが 4、5 名しか出てこない。当方が開発した電力、熱、水等のユーティリティデマンドを 15 分時間分解能で確率予測する TUD-PS (Total Utility Demand Prediction System) を、関連の研究しているポスドク研究員——いずれも女性で一人はイタリア、いま一人はベルギーの人——に詳しく説明してくれと頼まれたが、あとは私を含め皆、ゆるりたりとのびやかにやっているように見える。後期の講義は 9 月第 3 週かららしいが、その間の長い夏休み期間中、時期をずらして夫々〔ルビ〕それぞれが 1 ヶ月ほど休みを取るのだという。羨ましいと言えらうやましい。長期の休暇はむろん豊かさによるところが大きいのだが、ワークシェアリングが一般的になっているこの国の特殊な社会環境によるところもあるだろう。

よく知られるようにこの国の国土はその 1/4 が水面下にある。

Wadden 海に口を開けたような大水域は、現在、世界遺産にもなっている全長 32 キロのアフシュライト・ダイク (大堤防; Great Dike) によって湖 (アイセル湖) になっているが、もともとは海 (ゾイデル海) だった。ゾイデル海開発計画は 20 世紀の初頭 (起工 1927 年) から延々続けられ、淡水化が完成したのは 1968 年のことだった。

完成前の 1953 年 1 月 31 日夜半、北海で生じた大暴風雨が折悪しく満潮と重なり、全国 67 箇所の堤防が決壊、1836 人が死亡、実に溺死家畜 3 万頭、浸水家屋 4 万 7 千余戸、とのオランダ近代史上最大の自然災害があった。亡くなった人を人口比で見れば、東北大震災ほどでないにしろ、阪神大震災を遙かに超える規模の大災害であったことが理解されよう (ここで余談ながら——古くは 5.15、2.26、最近で言えば 9.11、いずれも邪〔ルビ〕よこしま) な連中がよからぬことをしでかした事件を指し、自然災害を言ったものではないが、東北大震災を指して 3.11 との言い方をする人がある……蓋し、アルカイダのテロ事件と同じく、国民皆がこのことを決して忘れるべからず、との意を込めての謂いなのだろうが、言葉遣いに軽佻浮薄の臭気漂う実に嫌いな言い方だ)。

日本の災害史の多くが地震により語られてきたのと同じく、この国の国土開発史は洪水との闘いで埋め尽くされてきた。そして、未曾有の大災害にもめげず、人々は復興を果たすのである。

小学校の地理でのこの言葉を聞いたと記憶している——”ポルダー”とは干拓地のことを

言う。内陸の Eindhoven では申し訳程度の運河しか見かけないけれど、海沿いに行けばそこからここに至る所がポルダーである。13、14 世紀から小規模な干拓は行われていたが、オランダ近代の黎明期とも言える 17 世紀に、ダイクによって堅牢な築堤を施し、その内側を例の風車でもって排水する技術が完成した。集落規模で、このポルダーを維持管理していくプロセスの中から、近代以降のオランダ社会に強固なコミュニティ意識が培われていく。1953 年の大災害から復興するに大きかったのは、オランダ人の勤勉さ、不屈の闘志、そしてこのコミュニティ意識だったという。

日本でもさかんにいわれた”絆”が、この国の戦後史を見舞った今ひとつの国難をも救うことになる。

かつてイギリス病をいわれるものがあった。1960 年代から 70 年代にかけて、社会規範の崩壊と産業基盤の脆弱化が、健丈な弾力を英国社会から奪い、全体にアパシーな空気が漂った。労働党政権下、企業の国有化、手厚い社会福祉を実現し、対して産業界は活力を失い国力は著しく低下、財政は悪化した——いまの日本と一部状況は非常によく符合する。これを克服したのは 1979 年保守党が政権を奪取し、鉄の女、サッチャーが登場して、大なたを振るって改革を断行したからである。

ことに至った事情は些か異なるが、同じことがこの国でも起きた。オランダ病である。

1960 年代に Groningen のそばの北海で天然ガス油田が発見され、オランダはにわかに資源長者になった。その後、70 年代に 2 度あったオイルショックが、この小国に莫大な収入をもたらす。これまで自らの勤勉さを抛り所に得ていた外貨が、左団扇で入ってくるようになった。これがオランダに思わぬ影響を及ぼすことになる。当時の通貨ギルダーが対ドル比で著しく上昇、輸出が滞り、製造業は大打撃を被った。賃金上昇と先の天然ガスマネーの余得で、欧州でも先駆けといえる高福祉国家となっていたことが、大きな徒になる。経済の悪化と同時に急速に国の財政も傾いた。このあたりのいきさつは、天然ガスによる一山当てを除くなら、現在も呻吟している日本の失われた 20 年によく似ている——デフレによる円高、産業の空洞化により競争力を失った産業と高齢化により破綻危機に瀕する年金と保険制度……。英国でサッチャーが登壇する頃、1980 年代初頭、オランダはほとんど破綻していた財政を健全化するため、増税せざるを得ず、不人気の政策は民意を得られずに政治は混迷した。労働コストの高騰は、失業率の拡大をもたらし、あれやこれやで一時はオランダに未来はないとさえ言われた。

しかし、ここからオランダは復活するのである。

いろいろな要因が上げられている。一つは労使関係の再構築だという。土壇場の切所に至り、国倒れては元も子もなくなるを知って、労使は協調的関係を模索し始めた。政府はワッセナル協定を定め、賃金増は経済発展とインフレに見合った額に抑えることを労使間で合意させた。また、正規雇用と非正規時間雇用の待遇を同等にして、特に女性を中心とする休眠労働力の弾力的活用をはかり、社会全体としての労働効率性を格段に向上させた。所謂、ワークシェアリングである。80 年代から景気は世界規模の緩やかな循環にのっ

て回復モードに入ったことも、オランダにも英国にも幸いしたろう。以降、オランダ経済は堅調な成長軌道に回復するのである。

このワークシェアリングがオランダで社会制度として受け入れられたのは、人々のコミュニティへの帰属心が強固だったからだとされている。

いまこうして連中と交わって生活している限りの表面的観察では、他の西欧や米豪とおなじ個人主義の国にしか映らないが、これらの歴史的経験が、彼らが自らの国の潜在力を知る上で大きな自信となっていることは間違いないのだろう。

さて、現下の日本に以上の次第がどれだけ当て嵌め得るのだろうか。

(Aug.19.2012)

オランダのはじまり

高校で習った世界史を思い出して欲しい。

このあたりは、かつてハプスブルグ家のスペインが有する属領であった。神が天地創造をされたことになっているが、この低地——Nether（低い）land ばかりは我ら自身が自らの手で作った——と言われるほどオランダの人々は自らを恃む心が強い。干拓を通じて国土そのものを造り出してきただけでなく過酷な自然と向き合うことで自分たちのコミュニティ意識を醸成しききたことが、相互扶助と独立不羈（[ルビ] ふき）の自尊心を育てていった。その独立自尊の価値観が、同時代の欧州では皇帝、王、教皇、世俗および宗教貴族たちが主権者であるなか、きわめて特異な市民層のデモクラシーにより運営される国の体制を生んだことは間違いない。

建国に至るオランダ創生期の歴史は惨憺たるものがある。

支配者のスペインは、当時並ぶ者無き世界帝国であり、欧州エスタブリッシュメントの老舗であるだけでなく、カトリックの保護者を自任していた。日本人にはなかなか想像し難いが、中世においては、相手が異教徒であれば、それは聖戦であると考えられ、略奪や都市の徹底的破壊など当たり前で、戦（[ルビ] いくさ）に負けることは、即、女であれば強姦、男であれば殺戮を意味した。相手を同じ人間だとは見ない上に、宗教的信念があるだけにおよそ仮借というものがない。いまのドイツを中心にヨーロッパの北にじわりじわり拡がりはじめた新教徒たちもカトリック本家のスペイン人になると、レコンキスタで追い払ったムーア人と異なるところがない。スペイン人が属領ネーデルランド住人である新教徒に対して行った苛斂誅求、宗教弾圧は陰惨の一言に尽きる。

彼らは耐え難きをたえ、忍び難きをしのぶ。しかし、ついに堪えかねて独立解放に立ち上がる。が、当時世界最強であったスペイン帝国の正規軍にそこらの民草が挑みかかるわけだから、まっとうないくさにならない。戦い馴れた織田軍団に対して筵旗（[ルビ] む

しろばた)の一向宗門徒が一揆を起こすようなもので、戦いはスペイン側に分があった。

ここで救国の英雄オレンジ(オラニエ)公ウィリアム(一世)が登場する。オレンジ公爵領(公国)はドイツにあったナッソー家が領有していた。ウィリアムは分家の長男だが、要するにドイツ人であり、四捨五入して云えばこのあたりの人である(このころまで地理区分上ドイツとオランダは明確には分けられていない——前者に住む者を高地ドイツ人、今のオランダ人を低地ドイツ人といっていた)。カルロス五世(神聖ローマ皇帝でもあったこの人はカール五世とも呼ばれる)の小姓としてスペイン宮廷に送られ、その息フェリペ二世の信頼も厚く、スペイン貴族でもあったウィリアムはオランダ属領の総督に任命される。ウィリアム一世は **Willem The Silent** と呼ばれるほど物静かな漢([ルビ]おとこ)だったらしく、きわめて義侠心に富んでいた。オランダの新教徒に対する苛斂誅求は、必ずや暴動や反乱となって返ってくるのでスペインの利益にならないと彼は本国に再三意見具申するが、聞く耳を持たない。ウィリアムは、新教徒に対する残虐行為を見るに見かね、遂に住民とともに立ち上がることになる。オランダ語(低地ドイツ語)のフーセンといえど乞食を指すが、ドイツ語(高地ドイツ語)ではゴイセンという(世界史の教科書でゴイセンの反乱と紹介されていたろう)。誇りと若干の自虐とともに自らを「海の乞食集団」と称える革命軍が組織され、独立を要求して一斉蜂起する。1568年のことだった。日本では、永禄11年、信長が足利義昭を奉じて入京した年である。

ウィリアム一世は戦い半ば 1584年デルフトでスペインが放った刺客に斃されてしまう(銃弾による暗殺だったけれど)。が、彼の家系からは軍事的な才覚のある者が次々とリーダーとして現れ、それぞれの局面で戦いを指導していく——余談ながら現在のオランダ王室はこのウィリアムの家系であるオラニエ=ナッソー家である(オレンジ公だからこの国のサッカーはじめ各競技のナショナルチームのユニホームはオレンジ色)。戦いは一進一退、役者も入れた代わり立ち替わる。ここで、重要なのは、役者はヒーローのオレンジ公だけでなく、蜂起した住民たちも重要な役どころを担っている点である。特にホラント州の、のちアムステルダムはじめ有力諸都市の有産ブルジョアたち——レヘント諸公とよばれた人々がときに重要な鍵を握る。つまりオランダははなから強力な王家があって中央集権的な国家体制が敷かれていたのではなく、草の根運動とも云うべき住民の反乱を組織化した都市ブルジョアたちがいて、時に応じてオランダ総督の家格を有するオレンジ公爵家の連中が担がれ推戴されたわけで、当時から現代的な意味での立憲君主制デモクラシーに近い体制が取られていたのである。このことは、これから重商絶対主義の世に向かう欧州にあっては殆ど奇蹟とも言えるが、(朝日岩波のように)無邪気に喜んでもおれないのだ。後のち述べるが、この民主的体制が徒となって、急速な国力衰退を招くことになる。

さて、オランダの独立戦争だが、延々と果てなく続く。

オランダは小国故の賢い立ち回りを見せ、ある時は籠城戦に堪え、またあるときはゲリラ戦に訴え、さらには外交も駆使する。スペイン帝国の隆盛への危機感から、また、同じ新教徒の国であるとのよしみから、さらに殆ど人種的にも同根同族であるとの繋がりもあ

って（元々は同じアングロサクソン系の人種で、当時でさえ、海を渡った者とその手前に留まった者の違い程度だとの認識だった）、エリザベス女王下の英国が共闘してくれる。英国の同盟を引き出すのに、オランダ側は有力諸都市の主権を英国に供している（正確に言うとなデン・ブリルはじめ 3 都市の主権を担保に 8 百万フローリンの戦時借款を英国から供与されている）。このあたりの歴史を見ると、イングランドとネーデルランドは現在の UK のように連邦化していたとしてもまったく不思議はない——実際、後のハナシになるが、第一次英蘭戦争（1652-54 年）後には、護国卿クロムウェルは、負けたオランダに対して併呑でなく対等な合併をしてはどうかと真剣に持ちかけたし、さらに後年の名誉革命（1688 年）の折りには、当時のオランダ総督（事実上はオランダの君主、つまり王様）オレンジ公ウィリアム三世がイングランド王を兼ねる事態も出来（[ルビ] しゅったい）し、このタイミングでも同邦化する可能性はあったろう。

さてさて、この国のことである。

結局、オランダの独立戦争は、1648 年のウェストファリア条約で正式に終結が確認される。ネーデルランド連邦共和国として周辺欧州各国に独立が正式承認され、はれてスペインからの独立を果たす。ただし、南部ネーデルランドはスペイン属領ネーデルラントに留まり、のちフランスとの係争、そこに独立した北部 7 州のネーデルランド連邦共和国が首を突っ込んだり、さらにはナポレオンに占領されたりとの紆余曲折を経て、結局、1839 年にベルギーとして独立する（ここ Eindhoven からなら、ほんの 20 キロほどのサイクリングでベルギーとの国境を越えられる——無論、塀や関所などない）。このウェストファリア条約は、オランダ独立戦争がそのさきがけであったとも言える、所謂、三十年戦争の講和条約として欧州列国に批准されたものである。最後の宗教戦争にして最初の国際紛争といわれ、また第一次世界大戦以前の欧州にとって最も破滅的だった大戦だともいわれる三十年戦争の終結をもって、ヨーロッパでは基本的には信教の自由が保障されるようになる。同時に大航海時代からの欧州における繁栄をほしいままにしてきたスペインの凋落が決定的になった劃期でもあった。

ヨーロッパは一気に近代に向かう。

(Aug.23.2012)

幕末のオランダ留学

オランダは近世日本にとって、いわば知の水先案内人であった。島国だからか、あるいはよく云うアジア的停滞をもたらした儒教的社会価値観の影響を少なくしか蒙らなかったからか、ゆらい日本人の知識欲はきわめて旺盛だった——この点、中国と地続きで、彼らをして東方儀礼の国と言わしめ、自らを小中華と称するほど儒教的規範を社会の隅々にま

で敷き詰め、新奇を探求することに価値を措かなくなってしまった朝鮮とは異なる。私たちの先人たちは、国を閉ざしている間にあっても、ほんの小窓を通じてもたらされる西欧世界の知識をつま先立つようにして知ろうとつとめた（昨今の若者の内向き指向、知的アパシーが、伝えられるほど深刻でないことを願ってやまない——我が学生たちよ、須〔ルビ〕すべから）く物を学び、外に出でよ——四海（天下、世界ほどの意味）は広いのだ——ここ TUE にもあまたの留学生が学んでいる）。所謂、蘭学の興隆である。ついで師匠のスジも悪くなかった。概してオランダは親切であった。寛政 7（1795）年、本国がナポレオンのフランス革命軍に占領されて以降、文化 12（1815）年にネーデルランド連合王国が成立するまでの 20 年間、オランダは国家としては一時的に地球上に存在していなかったが、彼らはそれを幕府に秘匿した。当然といえば当然だし、致し方ない事情もあった（実はこの間、本国との連絡も途絶し、この時期のカピタン（商館長）ドーフは、1803 年から 10 年以上もほっぽらかしにされた）。過渡的に見ればそう云ったことがあったにせよ、貪ってやろうと極端に情報をねじ曲げて伝えたり、捏造したり（よく聞け！○×新聞）、出し惜しみしたりするようなことはなかったといつてよい。欧州でも先駆けて市民社会を成立させ、合理と自立、平等といった近代的な価値観をいち早く構築するに至ったオランダが、師匠の国であったことが大きい。

ペルリの来寇で日本は外圧によって開国することになる。大急ぎで西洋技術を導入せねばならない。幕府は、これまでの行きがかりもあって、まず師匠オランダを頼った。彼らもこれに親切に応じてくれた。

1862（文久 2）年、幕府は西洋技術導入のためオランダに留学生を派遣する（全くの余談だが、日本から最初の欧州への留学生はたれだったか？名前だけが残っている——薩州鹿兒島の青年ベルナルド（洗礼名）は南蛮の伴天連（宣教師）に連れられてポルトガルに渡った——が、水が合わなかったのだろう、ほどなくポルトガルの大学街として名高いコインブラで客死する——例の天正遣欧使節の少年たちがローマに渡る少し前の頃である）。この幕府派遣留学生の一団は、船大工、鋳物師など職方 7 名を含む計 15 名というからかなりの大人数である。榎本釜次郎（武揚）、赤松大三郎（則良）、伊東玄伯、西周助（周）などの名前が見える。滞在期間は各人によるが 3 年から 5 年、伊東の帰国は明治元年だから滞蘭 7 年に及んでいる。実はこの留学生派遣の主目的は、彼らを海軍技術に習熟させ、幕府が発注した最新鋭軍艦、開陽丸を回航させることにあった。一行は約 7 ヶ月かけてロッテルダムに着し、そこからハーグやライデン、ロッテルダムと各地に散っていった。西周はライデン大学で経済学、政治学、統計学の修学研鑽に当たっている。榎本らは、ロッテルダムの造船所を経て、開陽丸の建造地であるドルトレヒトへまわっている。当時、海軍大臣の重職にありながら、長崎海軍伝習所で教官を務めていたカッテンディーケが、あれこれ留学生たちの世話をやいてくれた。幕末から明治期に急激に変貌する日本の社会風俗、政治風景その他諸々を外国人の目から客観的に観察した高質な記録がいくつか残されているが、彼の在日体験を綴った『長崎海軍伝習所の日々』（東洋文庫から翻訳が出ている）は

これらテキストの早い時期のものである。長崎で勝麟太郎（海舟）とともにカッテンディエーケから直接教えを受けた榎本は、開陽丸を南米周りで回航させ、幕末最後の混乱の渦中に帰国することになる。よく知られるように、榎本は、江戸城無血開城直後、徹底抗戦を唱えて幕府艦隊を率いて離脱し、戊申戦役の掉尾（〔ルビ〕とうび）を飾る函館戦争を主導した人物である。結局、開陽丸は蝦夷地江差沖に海没してしまう。艦齢短く薄命であった。

はて、現下、この TUE に何人の、オランダの 14 の大学併せて一体何人の日本人留学生がいるのだろう。

(Aug.27.2012)

エラスムス

ユーロが揺らいでいる。アイスランド、アイルランドから始まり、イタリア、スペイン、ポルトガルと続いて、昨年からはギリシャである。ギリシャでは、あろうことか国ぐるみで財政収支を粉飾し、ことの次第が明らかとなったことをきっかけに、国債デフォルト騒ぎが勃発、政治的混迷が今なお続いている。欧州の金融不安は出口が見えない。ジョージ・ソロスは、今次の欧州通貨危機はリーマン・ブラザーズショック以上に深刻なものになるだろうと言っている。一線は引退したと伝えられるが、1997 年のアジア通貨危機を引き起こした張本人の一人と非難され、悪名（日本では禿鷹ファンドなどと言っておりますなあ）と賞賛相半ばする伝説的投機家の予言だけに不気味な説得力がある。自国の通貨発行権を共同体に醸託（〔ルビ〕きょたく）することは、独自の金融施策を打てなくなることを意味する。そもそも経済力や国際競争力に大きな凹凸のある EU 加盟国内で単一通貨を導入することに無理があったのではないかとする論も目立ちはじめた。通貨統合を批准しなかった英国、デンマーク、ノルウェーの先見の明が言われ、英国では EU から脱退すべきではないかとの国内世論もわき上がってきた。基軸通貨ドルへの大いなる挑戦として始まったユーロ導入は失敗だったと云うことになるのか……たれもが先が読めずに推移を見ているところだろう。

1991 年のマーストリヒト条約により、欧州連合——EU が正式発足し、爾来、本格的な通貨統合と政治統合に向け動き出した。カネ、モノ、ヒトの往来が自由になることは、域内のローカルスタンダードの統一を要請する。通貨統合もその一貫だ。教育も例外でない。高等教育では、教授や学生の EU 内の交流を促進し、付随してこれまで各国でバラバラだった学位付与基準を統一することが試みられた。1987 年に発足したエラスムス計画である。その後、エラスムス計画と同趣のいくつかの計画はいったんソクラテス計画に統合され、現在は EU 生涯学習計画 (2007-2013 年) に組み入れられている。ソクラテス計画にしる、エラスムス計画にしる、ネーミングの妙はなかなかのものである。訊けば European Region

Action Scheme for the Mobility of University Students の頭文字からエラスムスだという。EU で成功した仕組みを域外にも広め、留学奨励を通じてオール欧州で人材育成に取り組もうとの動きが急である。勿論、その裏側には高等教育でもアメリカの一人勝ち状態から欧州の復権をはかろうとする戦略的意図がある。所謂、エラスムス・ムンドスである。

ついでに「勿論」を今ひとつ。日本は、国勢が下りはじめたこともあるが、そのことより何より言語障壁が災いして、欧州やアメリカ（米州と言うべきだろうが、メジャーリーグ同様、カナダの大学はアメリカの大学ランキングに完全に組み込まれていて国の区別は事実上ない）のこれら教育標準化の動きからは、勿論、埒外（[ルビ] らちがい）——カヤの外である。卑下しているのではない。致し方ないと思っている。とって近隣国との標準化もなかなか難しい。言語文化の違和が欧州域内のそれとは比較にならぬし、二言目には歴史認識カードを出し——どころか最近では露骨な挑発に恫喝と、政治外交上の摩擦（一方的にやられればなだから摩擦とは言わないか）がしょっちゅうあるようでは、現実と理想は遠いと謂わざるを得ない。いくら高等教育の標準化とはいっても、日本人は帝国主義者で悪逆非道の限りを尽くしてきたし、今もその萌しがあるから、ことごとに監視しなくてはならぬ——過去の阿漕に照らせば島だって何だって奴らの言う領土を少々取り上げてってまだまだアイコンってことにはならないし、自分たちには史的正当性がある…それにやつらは、戦後は意気地無しのキン抜きおかまチャンになって久しく、昔シナを指して言った張り子の虎よろしく、こっちが少々無体なことしたってやり返してはこない、日本に対しては何を言っても何をしてしても許される…こういったことを公教育で教えられてきた連中を相手に、まっとうなパートナーシップを築くことが出来ると思うことが、そもそもナイーブな幻想である。と言って、今から欧米が作り始めたテンプレートを真似てみたところで、英語での教育がサービスのスタンダードになっている以上、西欧語を母語にしている連中に伍していくのは難しかろう。正直、今から息せき切って、例えば、学部や大学院教育を英語化したって、（いくら大学にいらっしやるお歴々の大先生方が英語にご堪能で、講義などどってことないと言ったってだ——その実、日本語で喋られても学生は理解不能とも聞く…ああ無情——レ・ミゼラブル）そのコンテンツだけで、東南アジア各国から留学生が、わんさかやってくるような競争力をもつとは考えにくい。欧米にかなわぬことは無論のこと、英語を母語とし地の利もあるオーストラリアにも到底勝てないのが現実だ。東南アジアでは、西欧に植民地支配された時代が長いことに関連するが、特に科学技術に関する文化基盤は英語中心の西欧語で構築されており、インテリ層は日本人よりはるかにうまく英語を駆使する。そんな人々にとって、英語で供される高等教育という観点に立って果たして日本の大学が魅力的に映じるだろうか。そうは言っても、科学や技術の研究及び高等教育は本質的に普遍性を求めるものだから、欧米主導の標準化に逆らうことなど出来はしない。今は真似事でも何でも、彼らにくっついてあれこれ試行して活路を探すしかないのだろうけれど、ことに対するには基本的な戦略を練る必要がある——エラスムス計画をはじめた欧州人のような…。

東南アジアの人にとって日本が魅力的だと思わせるにはどうすればいいのか……西欧のやり方の真似でよいのか、との理路を逆順に辿る発想……斯様の構えを戦略的という……が切に求められている。左見右見（[ルビ] とみこうみ）して物事変えてみたり、闇雲に真似してみてもダメなのだ。ましてやカネばらまいて連れてきて表面上の数字（留学生〇×万人計画？）を合わせるなんて意味あるだろうか。国際社会によって立つ上で、頼みの綱だったカネさえも、今後はジリ貧で、しまいには底がわれるだろう。国力が落ちていく中、いまこそ先を見越した戦略を立てなければ、ジリ貧はドカ貧になるだろう。根拠のない前提やあらまほしき思いこみを空疎な麗句で飾り立てても競争には勝てない。

そういえば先頃、『日本再生戦略』なる文書が閣議決定（平成 24 年 7 月 31 日決定）された。みると、原発依存から脱却し、グリーン成長によって、中小企業を育成しつつ、産業基盤の競争力を高める——生活雇用面では、フリーターを減らし、余暇時間を増やす——等々と総論としては一々誠にもっともな、が、現実には夫々がトレードオフの関係になっていて、とても一筋縄にはいかない（もっと言うと、それらの同時実現など到底覚束ない）御題目が称えられている。こういうのを本当に「戦略」というのだろうか。御題目はあった方がないよりマシとおっしゃるかも知れない——鯛の頭も信心からというから。だが、大学改革や教育改革について述べた人材育成戦略の項に、「優秀な外国人学生 30 万人受け入れる」等とあるのをみれば、現実を全くわかっていない人たちの役人的作文に過ぎないことがすぐに露見する。結びに曰く、もって日本のプレゼンスを高らかしめると——どうやって？留学生云々について言えば、どうやって 30 万人連れてくるのですか（30 人じゃないですよ）、と反問したいのだが、そこは法人化した各大学が良いプランを練って持ってきて下さい、と虎ノ門の連中は言うのだろう。実をみない——つまり本質的な意味で戦略のない役所的数値目標は、害悪の方が遙かに大きい。なぜとって、到底、本質の目標達成はできないから、数字上の帳尻だけを合わすことになり、そのことへの資源蕩尽を考えると、はなからしない方がマシだったということになるからだ。総枠だけ勝手に決めておいて、あとは現場が努力して俺たちが決めた目標を達成すべく頑張れ、というのは、どこかでみたやり方だ。私たちは、まことに高い実地教育（多くの犠牲を払った史的経験）で、三宅坂（旧陸軍参謀本部）の空理に基づく独善（作戦指導）によって、現場（ノモンハン、ガダルカナル、インパールは言うに及ばず、およそあらゆる戦闘現場にいた前線将兵）がどれだけの惨状に遭ったかを学んだ筈だ。豊葦原（[ルビ] とよあしはら）の瑞穂（[ルビ] みずほ）の国の住人である私たちは、あまりにあっさりし過ぎていて、過去に拘泥しないと言えれば聞こえはいいが、要するに直ぐに物事を忘れ、真に経験から学ぶことが少ないのではないだろうか。見た目や耳さわりの良いうたい文句を掲げ、実現の具体方策は後で考える、あるいは現場に考えてもらおうと云ったスタイルで、ほんとうに物事為るだろうか。日本人には戦略をじっくり練り上げて事に対すると云うのが、どうも不得手のように思えて仕方がない。ここにおいて、改めて、欧米の連中の乾いた男性的計算能力のようなものを感じるわけだ。

ここアイントフォーフェン工大でもそうだが、欧州の大学では、EU内での単位互換が整備され、極端に言えば学生がセメスター毎に域内を自由にあちこち移動して、学位を取得することが可能になっている。究極のシームレス制である。

Janの解説によれば、この制度——エラスムス・ムンドスによる学生の出入りは常に受け入れ超過気味との由で、オランダにとってそう旨味ある制度ではないような感想をお持ちのようであった。無論、分野によるだろう。

さて、そのエラスムスのことである。

——デジデリウス・エラスムス、別名ロッテルダムのエラスムスは、おそらく、ルターが主導する宗教改革に相前後して活躍する人文主義者として知られているだろう。生年は1466年説と翌1467年説があり、後者であるなら応仁元年、十年にわたる応仁の乱の始まる年にあたる。没年は1536年。

この稿にも登場したリーフデ号の旧名はエラスムス号であった。17世紀当時から既に思想家としての彼の盛名は確立していた——余談ながら、リーフデ号の船尾板（トランサム）を装飾していた身の丈四尺ほどのエラスムス像が東京国立博物館に伝わっているが、これにはおもしろいわれがあって、下野（[ルビ]しもつけ）佐野の龍江院観音堂にカテキ像として伝わっていた木像が、大正9（1920）年になって実はエラスムス像であることがひょんなことから判明、慌てて重要文化財に指定された。エラスムスの生地ロッテルダムには例の有名な銅像とともにオランダの大学としては比較的新しい1913年設立のエラスムス大学がある。

エラスムスといえば『痴愚神礼讃』が真っ先に思い浮かぶだろう。『痴愚神礼讃』は、痴愚の女神が大衆を前に古典を引用して大演説する舞台を借りながら、当時のエスタブリッシュメントである王侯貴族、聖職者を強烈に風罵し、およそ人間の営みには愚かさが伴うものなのだとの普遍的メッセージを埋め込んだ一大パロディーである。カトリック教会がいまだ強固な権威を保っていた当時、そして、ルターが主導する運動が大きくなうねりを見せ始めるなか、内容が内容だけに、エラスムスはルターの宗教改革を支持する論者にとられた。蓋し、それが今日に至る彼への評価の基盤にあるのだろう。新教国のオランダではいち早く市民社会が形成された。このオランダと貴族制を可成り温存した形態ではあったが似たようなプロセスを経た英国とが、当初、近代への扉を押し開く先導役を果たしたことは間違いない。その大きな文脈のなかでは、西欧にモダニズムをもたらした前奏として、宗教改革は必須の歴史エポックだった、とのどちらかといえば肯定的な評価がなされている。

ルネッサンス以降、ギリシャ、ローマの古典への回帰は、人文主義者とよばれる一群の人々を生んだが、彼らの思想の延長線上には、宗教貴族化して久しいローマ教会の制度疲労というのか、聖職者の墮落など、様々な事態を通じて綻びが顕在化した教会が抱える本質的問題点に目を向けざるを得ない必然があったと言える。もちろんあからさまな形

でカトリック教会への反抗を表意することは、いまだ大きな身の危険が伴った。実際、ヤン・フスやジオラモ・サヴォナローラといった急進的変革を求めた人々は火刑への途を辿った。

エラスムスはローマ教会側、つまり体制側の人であった。しかし、宗教界の政治中枢にいる人というよりは、ラテン語への造詣が深い神学者として、そしてギリシャ語訳から新約聖書を翻訳するなど積極的に著作活動が続ける——当時原始的ながらイタリアを中心に印刷出版業が興隆しはじめていた——今風にいうと作家として名が高かった。そのエスタブリッシュメント側の人であると思われていたエラスムスが、戯作の形式に仮託して聖職者たちを笑罵する挙に出たわけだから、その反響が驚天動地のことであつたらうことは想像に難くない。殆ど革命思想とも言える急進的な論を唱え、運動盛り上げの先頭に立っていたルターは、当然のようにエラスムスを同志と見、自ら主導する宗教改革に助勢してくれる存在だと見なした。一方、既成の宗教界は、エラスムスを獅子身中の虫と見た。前後三度のイングランド滞在を通じて終生の友人となったトーマス・モアに宛てた書簡が残っている。『ユートピア』の著作で知られた彼ならば、同じ人文主義者でもあり、当時の社会の矛盾に関しての見解を共有してもいたから、きっと自分の本意を分かって貰えると思つたのだろう、愚痴まじりに『痴愚神礼讃』への非難に対して釈明をしている。いかにこのベストセラーの風刺が与えた社会的インパクトが大きかったが想像できる。結果的に、既成の宗教界のエラスムスに対する不信やら怨恨は抜きがたいものになってしまう。

しかし、エラスムス自身はラテン語や古典万卷に通じる学識深い神学者にして敬虔な一キリスト者であり、宗教改革が燎原の火のように広がる中、教会の分裂（プロテスタントがカトリックから分派する）に一貫して反対し続けたカトリック司祭であつた。

双方から板挟みにあつたエラスムスは非常な苦境に立たされてしまう。

ルターへ書簡を出し、彼の革命勢力から必死に距離をおこうとするが、大きな歴史の渦の力には抗しがたいものがあつた。宗教界はエラスムスをルターと同心の反逆者と難じつつ、そうでないのならその筆力と学識および知名度によって、教会への忠誠をルター論難の表明によって示せと迫つた。

革命期の熱をはらんだ空気は、闘争の圏外に立とうとするエラスムスを捕らえ翻弄する。自らの信念と学問への良識から不偏不党を維持しようとする彼の姿は痛々しいまでに誠実に映る。彼を変節の人とする論もあるようだが善意に解釈すれば、学徒として常に中立不偏であろうとした彼の態度が（Wissenschaft als Beruf——『職業としての学問』を講じたマックス・ウェーバー以降の）近代的な意味での学者のあるべき姿に重なって、エラスムスの盛名を高らかしめているのだろう。

このくだりはヨハン・ホイジンガの『エラスムス』によるところが大きい。いわずと知れた二十世紀が生んだ知的巨人の一人である。彼自身が既に巨大な知性であつたホイジンガは、この母国が生んだ知的先人への限りない敬意と共感を動機として筆を執つた。一部の著作に関しては読者を失つていなかったとは云え、十六世紀思想史の研究者以外にとつ

ては忘れられた中世の知識人に過ぎなかったエラスムスに、どうしてホイジンガは再び焦点を当てようとしたのか？蓋し、ナチスに占領された母国に踏みとどまり、最後まで知的な誠実さを失わなかったホイジンガ自身の軌跡とエラスムスのそれとが重なって見えたのだろう。

この風土が生む知的誠実さというのは、時代を経てもときに同じような類型を世に送り出すようだ。

(Aug.31.2012)

信用について

昼食の折、Jan がジョーク混じりに話してくれた。

彼は私と同じ自転車通勤である。通勤には使わないが、工学の先生だけあって、メカにも詳しく、車にも一家言持っている。そこは私とまるで違う（車も機械もまるでダメで、何の工学博士かわからない）。現在の車は新車で買い、随分と体になじんだもので、かれこれ九年も乗っているという。その一台前、そのもう一台前は中古車を買ったらしいが、それがいずれも盗難にあったというのだ。この国で？確かにオランダといえば自転車泥棒の多いことで有名だ。——否、ここではない。チェコのプラハに旅行に出掛けていたの盗難だったらしい。にわかには信じがたいのだが、数年挟んでチェコにバカンスに行った折、同じストリートの全く同じ場所の路上パーキングロットで、デパートに買い物に出掛けた僅か数十分の間にマイカーが姿を消していたらしい。一度目は乳飲み子を抱えて、旅先から帰ってくるのが大いに難儀だったと言い、二度目はさすがに自分のたぐいまれな運——それも不運の方だが、を思って涙が出るところ、ほとんど啜ってしまったという。なぜなら、いずれも場合にも車体に盗難保険がかかっている、いわば焼け太りで実質として経済的損失にはならなかったから。日本では事故に対する対人や車体の保険は一般的だが、盗難保険をかけているひとは少数派だろう。訊けば、欧州やアメリカでは常識らしい。むしろ日本の常識を知ってみな驚いている。転ばぬ先の杖との言葉は知るが、盗（[ルビ] やら）れる前の保険、との謂いを我ら日本人は遠いことのように思うだろう。旧東欧圏では特によく車両の窃盗被害に遭うらしいのだが、これらの多くはウクライナあたりに売り飛ばされているらしい。香港出身の学生が言うには、一昔前、香港でも盗難車の被害が頻発していたらしい。盗んじゃ中国に売り飛ばす組織的プロの盗人集団が潜入していたからだ。が、今の頃は、逆に中国の方から、なりはベンツでエンブレムはトヨタ、でエンジンはホンダもどきといった恐るべき模造コピー車その安値で香港の市場に攻勢をかけてきていると言うから大笑いである。

他者が入り交じる大陸にある国々では、こういった類の盗難被害はそう珍しいことでは

なく、故にそれをカバーする保険があるということなのだろう。理解が届かぬ日本人としては、それを聴いて島にも盗難保険をかけられないか、とのピントはずれを考えるかも知れない。なにしろ、隣人に盗人されてもドロボーと叫び声すら上げられず、盗みに入ること事前に公言している隣家に住む強盗には、どうか手荒なことはしないで、などと哀れみを乞うているんだから。悪党に慈悲を乞うとは、木によって魚を求めるが如しというのか、葬儀屋に行って結婚披露宴の段取りを請うようなモンで殆ど漫画ではあるけれど、せめて保険くらいかけてはどうか。どんな保険がある？そう、そんなものないですよ。かねがね言っているけど、いっそ 51 番目の州にして貰うなんてのはどうでしょう。どうせ、よく言って日本はアメリカの保護国、見ようによっちゃ植民地なんだから。故に我が学生の諸君諸嬢よ、英語は日本語くらい喋るようにしとかなないとなりませんぞ。ナニ、どってことないですよ…日本語だって大した語彙ないんだから。

信がおけないとみれば、リスクをヘッジする——保険の起源は地中海貿易で繁栄を謳歌した中世ヴェネチアにある。破船をはじめとする事故の類は確率事象だから、絶対に生起しないことなど前提に出来ない。そこに保険の発想があるわけだが、隣家の振る舞いにしろ、他者の言にしろ、人が織りなすやりとりの中で、相手に全幅の信頼が寄せられるのなら、保険をかける必要はないし、それが理想でもあるだろう。が、浮き世は理想ばかりでは進まないモノでもある。

この稿は、自分のオフィスでものしている。

Eindhoven のではない——九大の自室である。

滞在が半分を超えたころ、9月はじめから1週間ほど一時帰国してくれと頼まれた。所属の部局（大学院総合理工学研究院）の重大事と言われては致し方ない。ヒラの教授なら知らず、長に次ぐ責任を執っていることを考えれば拒否は出来ないと最後は諦めた。が、当初は、言葉の信とは何かと随分と煩悶した。今次の滞在については、要路には遙か以前、役職就任以前に承諾して貰った。もちろん、教授会はじめ承認手続きもきちんと踏んでいる。手続きといえ、副研究院長としての役職も期間中は解かれたことになっている。また、くだんの重大事がこの時期に来ることも以前からわかっていたことである。もっと言うと、その重大事については、行きがかり上、放っておけないので、誠心つとめたけれど、分掌上はラインど真ん中とは言えないもので、全くのお飾りの方を除けば私は書類上第三位の責任者である（に過ぎないなどとは言わぬ）。行く前に一時帰国をお願いすることになるかも知れないとでも言われていればまだしも、出先の持ちコマを気軽に呼び返すようなやり方をされては、一体どこに信をおけばよいのかと思っても無理はないだろう（大学とは、営利企業にあるような厳格な責任と義務を負う垂直なガバナンス下にあるわけではなく、甘っちょろい言葉で言えば、合意と自律とを基盤にして営まれている有機的な組織体ってことになっている——それに、わたしは私を選んだ組織に対する責任感はあるが、たれかの持ちコマであるつもりは毛頭ない）。一時帰国に際して生じる経済的損失（オラン

ダ政府からの fellowship はその期間中指して止められるのにアパートの契約は解除できないこと等)は、日本側の制度上、一時帰国の出張旅費では当然手当て出来ないで、結局、私個人が被るしか方途がないのにも腹が立った。関行男大尉を最初の特攻隊の隊長に指名したとされる大西瀧治郎中将は、最後のさいごには、終戦日翌未明に割腹自刃することで責任をとったけれど、お国のために特攻で行けと言っておきながら戦後も生き残った「征かせた」側の人々が少なからずいた。随分とハナシの品は下がるが、お前がなけと言う点では変わらない。ゼニ金を言っているのではない——言う側のモラルを問うているのだ。私一個の福利損益を離れ、我が非才が些かばかりか公益に資しているのだとの身のほど知らずを許して貰うなら、わたしがたまさか帰って出来ることより、ここにとどまってあれこれすること方が、長い目で見れば有益なのではないか等との妄想ももたげてくる。が、最後は静かに諦めた——私一個の腹立ちなど大局に立てばどどってことないし、忍んでしのべないものでもなし。それに、島のハナシ同様、こんな予期せぬ出来事かけられる保険など、むろんありはしないのだから。

海外滞在中に一時帰国すると云うのは初めての経験だが、奇妙な気持ちである。

あすはオランダに帰るとの最後の日、今年はずかしたという猛暑のこれが最後かとおもわれる蒸し暑さのなかで、これをものしている。

碧 ([ルビ] あお) い空と冷涼で乾いた空気が懐かしい。

(Sep.8.2012)

一週間ぶりに戻ってみると既にこの地は一層深く秋に踏み込んでいた。

土曜夕方 6 時にスキポールにつくと電車の中でも駆け足しながら、アイントフォーフェンに 8 時前に辿りつきました。日曜は店屋が一切閉まってしまうので、土曜の買い物を逃すと、冷蔵庫に買い置きがあるとはいっても、食いつなぐのがことなのです。コンビニなんてないんです (便利は良いけど、けばけばしいなりがヨーロッパのしっとりした街並み風紀にそぐわない、と合意されているのでしょう——チェーン系スーパーのコンビニ店舗はあるにはあるがそれも日曜には閉まる)。営業時間滑り込みで駅前のスーパーで買い物 (閉店前のお総菜割引なんか買っちゃって) を済ませ、家路につく自分をかえりみると不思議な感覚になります——なんだか長年住み慣れた町に戻ってきたような。

ときに、一週間の一時帰国は体には宜しくありませんな。年齢のせいも、ここ数年で時差ボケに対する適応力がガタッと落ちたと感じています。騙しだまし、ぼちぼち戻るのに大体一週間——その頃、またこっちに戻ってくると、adjust する暇なく次の時差ボケに晒されるわけです。一週間の海外旅行より、一週間の一時帰国の方が辛い。どうしてか? 帰国中は旅行先にいるようなダレた生活は送れないわけで、降ってくる日常の仕事をかき

ねばならないため、ついつい眠れないのなら眠らなくたって構うモンかと思ってしまうからでしょうか。日本にいる間も当地に戻って来てからも、満身に睡眠が取れず、う〜クルしい。なに？一人快を貪ったバチが当たったんだらうって？

スピノザ

1990年に住んでいた Leeuwarden はフリースランド州の州都といえれば仰々しいが、人口8万人程度のまことにこぢんまりした田舎町であった。夕飯はまちの一膳飯屋という風情のレストランを紹介され「本日の定食」を意味する Dag Kaart (Day Plate) ばかり食っていた。本当に一膳飯で、巨大な皿一枚に主菜とサラダがのせられ、傍らに主食のゆがいたジャガイモが大盛りにされていた。若くもあったから目を白黒させながらもなんとか食いきったけれど（喰い物を残すことは極悪の非道と親から躰けられていたので）、日本人にはもてあますボリュームであったことを覚えている。連中の巨軀に得心がいった。その一膳飯屋の屋号が「スピノザ」であった。日本で云えば、田舎の定食屋の看板に「世阿弥」か「親鸞」とあるようなもので、どう考えたってヘンだ。どういった了見でこの大哲学者の名前を冠したのか、店主に訊いてみたいと思ったが果たせなかった。その後、1999年の初冬、米国での1年の在外研究の帰路に、寄り道してこの国に立ち寄った際、レーワルデンにも足をのばした。家人どもをスピノサに連れて行こうと小半ときばかりダウンタウンをさまよったが見つからない。この辺りだった筈だが…ほんの10年前だが、まちの様子が変わってしまったのか、十年一昔とは言うから、もうなくなっているのかも知れない…否、それとも我が記憶が毫碌（[ルビ] もうろく）したか、と思った刹那、あったあった、あそこだ…とあつけなく見つかった。こんな様子だったかしら…。キャンドルの薄明かりだけで照明された店内に入って、ぐるりを見まわす。当然のように Dag Kaart を注文する。給仕の若い男に屋号のいわれを訊くが要領を得ない。かろうじてスピノザが昔の大学者だったことを知るだけで、本当にお前さんはオランダ人かいと反問したくなった。

バールーフ・デ・スピノザは1632年、アムステルダム裕福なユダヤ貿易商の家庭に生まれた（1677年没）。彼の両親は迫害から遁れるためポルトガルから、自由の気風に富んだ新興国のオランダに移り住んできた。近代の萌芽である市民社会をいち早く打ち立てたオランダが、彼らの選択した移住先だったこととスピノザの出現は無縁でない。スピノザはデカルト、ライプニッツと並んで合理主義的哲学の祖とされ、19世紀にヘーゲルにより主導されたドイツ観念哲学にも大きな影響を与えたとされている。時代柄、神の存在やそれに対置される自己の存在をどう規定し、理解すべきなのかを言論の出発点にしている。スピノサ、デカルト、ライプニッツの三人いずれにも通底するのは、まだ教会が社会的に小さくない影響力を保持していたこの当時、神秘主義的宗教観を排し、あくまで思惟する主体のとしての人間の合理を認識の基盤に据えたところにある。彼の代表的著作とされてい

る『エチカ』では、論述を「公理」から出発させ、諸「定義」を導入して、「定理」に通じ、最終的には「証明」によって言わんとする命題を確定される、とのスタイルで全篇貫かれている。殆ど数学の論考である。『エチカ』の副題には、ギリシャ古典である「ユークリッド幾何学の秩序により、論証された」と添え書きされているが、ラテン語で言う「斯く証された——*Quod Erat Demonstrandum*」（中学高校の証明問題の結に気取って Q.E.D.と書いていたが、たれ一人この語源を知る者がなかったのをいま苦笑しながら思い返している——*Question EnD* じゃないかとの珍説もあった）と高らかに宣する裡には、明らかに宗教的ドグマからの解放が意識されていた。実際、彼は宗教界から無神論者と排撃されることになり、言論界に名声を博する一方で、世に出るのをどこか憚る風があった。いずれにしろその哲学思想は近代の合理主義そのものであり、スピノサたちの仕事が、モダニズムの扉を押し広げ、彼ら以降、近代啓蒙思想家たちが群がり出でるようになったことは間違いない。

スピノサが知的偉人として崇められているのは、思想哲学そのものもあるだろうが、彼の知識人としての爽やかな生き方にもあるのかもしれない。

その若い晩年、プファルツ選帝侯からハイデルベルク大学教授に招聘されるが、思索の自由を掣肘され、跼蹐（きょくせき）して生きるよりも在野の知識人であることを欲する、と言ってこれを固辞し、レンズ磨きで生計を立てていたという。武士は食わねど高楊枝——たとえ傘張りの内職をしようとも、自分を枉げての仕官などせぬ……凡俗には真似の出来ない、気骨の学者だった。ほぼ同時期に活躍した大泰斗にして政治的御用学者だった新井白石（1657～1725）とはよほど異なった風韻だったことを認めねばなるまい。そのこともあってオランダでは、いまだに最高の知識人として敬せられている。プロテスタント的禁欲主義と誠実な知性は、モダニズムの最も良質な徳目である、との合意だろう。40年前まで流通していた当時の最高額紙幣である 1000 ギルダの肖像がスピノサだった。さしずめ聖徳太子のような存在である。そう考えると、場末の食堂の屋号であっても不思議でないのかも知れない。ボロ屋であるほど、燦然と綺羅を放つ……そんな逆説的な命名なのかもしれない。

(Sep.11.2012)

ことばのハナシ

当地では昨日リビアであったアメリカ大使殺害事件が大きく扱われている。と云って CNN はじめ米国メディアほどではない。一昨日（9月12日）に行われたオランダ下院総選挙で（この国では平日に選挙を行うらしい）、緊縮財政によりユーロ護持を掲げるルッテ首相の右派中道の自由民主党（日本と同じ *Liberal Democratic Party*——LDP）が勝利しそうだとのニュースが、当地メディアでは一面を飾ったし、BBC でも大きく扱われていた。折し

もドイツ憲法裁判所が欧州金融安全網は合憲との判断を示したタイミングと重なって、欧州金融危機が最悪の事態をひとまず回避したとの安堵感の方がここでは news value が高かった。が、リビアはじめ中東のニュースは日本より遙かに関心度が高い。リビアの事件に呼応するかのように、エジプトのカイロでも大規模な反米デモが行われている。予言者モハメッドを冒瀆したとされる映画（ハリウッドで密かに制作された）が引き金らしいが、星条旗を焼き払い、氣勢を上げる民衆の図は、そのまま中国各地で繰り返される大規模な反日デモやソウル日本大使館前での反日パフォーマンスに重なる。日の丸が焼かれた後に星条旗が同様な目に遭っているのをみると、腹立ちが幾分か紛れるのは我ながら不思議だ。持てる国が持たざる国々の民衆に反感を抱かれるのは致し方ないとでも思うからか。彼らの敵意に辟易しつつも、蒙昧なションベン垂れはいつまでたってもしょうがねえなあと云った代償心理が幾分かでもはたらくのだろうか。

が、両者は、コミュニケーションという観点からみても、根本的に異なると言わねばなるまい。CNN の突撃レポートで氣勢を上げる民衆にインタビューをしていたが、うち数人はつたないながら英語で自らの怒りを口にしていて、きっかけになった映画を本当に見たかどうか、デモを扇動する奴がいるかといった問題もあるけれど、多くの人々がこの発端にアクセスし自ら判断することが少なくとも可能性の次元では開かれていたわけだ。コミュニケーションの媒介が英語であることが大きい。対して、中国や韓国の反日デモの構造はどうだろう。まるで違うと言わねばなるまい。北方四島だってそうだが、竹島、尖閣だって客観的な史実史料に立ち返って、近代的国際法を有効な枠組みとする立場を是とするなら、どちらに理があり、どちらが無法者の横車を押しているのかは明らかだ。けれど、連中はそれを知らない。反日が人々のガス抜きやら国の一体感を強化する具にされているわけだが、無論それは連中の歴史教育でしかと擦り込まれていることが効いてのことだとしても、そもそも情報にバイアスをかけることが可能なのは彼我に大きな言語障壁があって、体制側が操作して流す情報以外に人々が容易に一次ソースにアクセスできないことが効いているからだろう。もうこうなると事実を知らないのではなく、知ろうとしない知りたくないと言う感情の方が勝ってしまう。もっとも理由をそれだけに帰すことはできなくて、先の大戦に至る過程で当方がなした悪さへの贖罪意識やら、強い自己主張をどちらかといえば悪徳と見、周囲とは波風立てずに穏便にやっていきたいとの日本人特有の価値観もあるだろう。それより何より、正しいことを正しいと考え、それを自分うちに説くことも教えることも自ら禁じ、ましてや事実だと大言せぬまでも周囲に対して自ら信じる己の主張をきちんと伝えようとせず、そのことを徹底的に怠ってきた戦後主義の頹廢の弊が一番大きいのだが。翻って、東アジアで、中東はじめその他の地域程度に英語の流通力があれば、反日デモもそれに至る摩擦も随分と景色の違うものになっていたのではないだろうか。もっともこの論も今イチャ怪しいところはある。言語障壁が全くない筈の国内にあっても、くだんの島々にまつわる史的事実経過を正しく理解している人がどれだけいるかを考えると我ながら二の句が継げなくなるので。

現実にはあり得ないし、言語障壁のメリットを見ない論点にたった絵空事だけれど、日本、中国、韓国で爾今すべてを英語化すると、物事さぞかし面白かろうが。日本で英語ねえ…やっぱむりですよ。

日本のインテリにとって、英語は鬼門である。なぜとって、まったく言語体系が異なるから、日本語での思惟が深くなればなるほど、英語でそれを伝える上での障壁が高くなり、一方で、(人によって多寡はあるものの)言語に割ける知性は、蓋し、限定されているだろうから(そのことばかりに能力を使えば、本質の語るべき内容そのものが枯れる)。もちろん、新渡戸稲造、鈴木大拙はじめ例外的な知的巨人を上げることは出来るが、凡俗としては、どうしたってこの知的フラストレーションは免れ得ない。キケロに次いで引用されることの多い著者らしい(キケロと並称されているところがもの凄いが…)言語学者チョムスキーは、言語学習の能力に限界はないなどと楽観的なことを言っているが、それは彼の想定していることばが西欧語だからに過ぎない(我が学生に告ぐ;これを読んで、英語が出来ない自分は日本のインテリとしては致し方ないのだと云う間違っただけの受け取り方をせぬように!先ず自らを知識人とするのがすでに僭上の沙汰である——もっと本を読んで物を学べ!)。バーナード・ショーは、英国と米国は英語という共通の言語で隔てられた二つの国である、と言った。両国関係の機微をよく言い表していると思うが、しょせんはどんな隔たりがあろうと言葉は通じる——つまり英語を話し理解するというのは人が飯を食うが如く当たり前であり、それが出来ない人というのは人間の姿([ルビ]なり)はしても火星人のようなモノだとの傲慢を読むのはあまりな僻([ルビ]ひがめ)か。

かつて幕末期の長崎で、オランダから招いた軍医ポンペから、日本ではじめて西洋医学が体系的に教授された。急造の医学校をつくるに当たっては幕府奥医師、のち明治陸軍初代の軍医総監になる松本良順(明治後、順)が中心になった。選抜された受講者の中には長与専斎や関寛齋がいる。かれらはみな蘭学を学んだ者たちであったが、講義の実効を上げるために、授業は同時通訳で行われた。受講者にして通訳だったのが語学の天才と云われた司馬凌海である。彼は独、英、蘭、仏、露、中の6カ国語に通じていたらしい。欧米人で数カ国語を操ると言っただけで別に驚かないが、彼は6カ国語の読み書きが出来ただけでなく、会話も淀みなかったというから、殆ど半神的な才能だったのだろう。明治後、医学校(東京帝国大学医科大学の前身)で三等教授をしていた頃、ドイツの御雇い外人から、貴下は一体何年間ドイツに住していたのか、と問い返されるほど、まったく訛りがなかったらしい。(出身の佐渡からは早くに島抜けしたけれど)もちろん彼は日本からは一歩も外に出たことはなかった。

現下の *Lingua franca* (リングア・フランカ;世界共通語の意)と云えば英語しかないが、話者の訛りで大概どこの国の出身者がわかる。英語を母語とする人ですら、どっから来た人なのか、発音イントネーションで大抵わかってしまう。訛りは国の手形とはよく謂ったものだ。もっとも北欧人とまでは推量出来ても、さすがにスウェーデン人なのかノルウ

エー人なのかまでは判じかねる——東夷（[ルビ] あずまえびす）である私には学生の謂いから彼彼女が博多出身か北九州出身かまでは判別できないのと同じだ。オランダ語を母語とする人も割合すぐ解る。オランダ語の発声は独特で、特に **g** の発音が特徴的だ。文法構造やら語彙やら何もかも似ているドイツ語とも際立って異なる。このことが、オランダ人の喋る英語に聞く「オランダ訛り」の八割方を説明しているように思う。**Groningen**（ドイツ国境に接する **Groningen** 州の州都）は英語読み、あるいはドイツ語読みするとグローニンゲンだが、日本人には語頭の **g** は **f** に聞こえる。だから固有名詞については、中国関連の人名、地名を例外に原音主義（その昔、朝鮮半島の人士の名前も中国同様に漢字表音だったがいつのまにか金大中（キンダイチュウ）がキムデジュンになった——この変化は彼の拉致事件（金大中事件）が起きた 1973 年から大統領になる 1998 年までの間の出来事だと思う——どっかから苦情でも言われたのだろうか）を取る日本語ではフローニンヘンと訳されている。しかし、よく聴くとこの **g** を単純に **f** とするにも違和がある。現地の人によくよく尋ねると、喉の奥を掠れさせる感覚で **g** と発声しているらしい。それを子音のバリエーションに乏しい日本語話者が聴くと「フ」に聞こえるわけだ。ついでに言うと、**J** は **Y** の発音になる。受け入れの **Hensen** 教授のファストネーム **Jan** は、英語ならジャンだがヤンである。したがって、わたしはジュンでなくユンである。1990 年の滞在時、周りからユン、ユンと呼ばれ、何だか犬コロみたいで最初はえらく屈託があったけれど、じき馴れた。この **J** の **Y** 発音はドイツ語も同様だ。

これはどこかで書いたと思うが、オランダ語はドイツ語と英語のチャンポンのような言葉で、実際、規矩厳しい文法を保持するドイツ語に対して、性も格変化も一切なくなった英語の丁度中途にあるイメージだ。嗤うのは、この国の言葉では、謝意の表明は、**Thank you** と **Danke schoen** の中間で **Dank u** という。

英語表音とオランダ語表音については面白い咄（[ルビ] はなし）がある。

こちらでは大抵のまちで毎週土曜日に **Markt**——広場の青空市がたつ。安くて新鮮なチーズ、ハム、ニシンの酢漬け、野菜等々の食料品、花、衣類その他が手にはいるので、大層なにぎわいだ。オランダといえばこれだとイメージするだろう例のストリートオルガンの賑やかな調子によって、大道芸やら食い物屋台、古着、骨董、がらくたの類の露店も出るところもある。さながら蚤の市である。この蚤の市という言葉だが、よく名訳の典型例に上がる。原語はいわずもがな **flea market** である。蚤 (**flea**) のたかった怪しげな古着が商（[ルビ] あき）なわれている感じが巧まず訳出されている。この英語だが、実はオランダ語起源で古着とも蚤とも全く関係ない。いまの **New York** は 17、18 世紀の英蘭戦争前はオランダの植民地で、**New Amsterdam** とよばれた。往時、マンハッタンの **Maiden Lane** の低地 (**valley** 英語；**Vallie** 蘭語) で定期市がたっていた。**Vallie Market** が訛って **Vlie** になり、これが英語音化して **flea** になったそう。

言葉とはまことにもって面妖なものである。

(Sep.14.2012)

英蘭戦争

連日の反日デモに、上海はじめ各地では邦人が理不尽な狼藉に遭う事件が相次いでいる。人の庭先で示威行為をするならまだわかるが、警備艦艇 6 隻が白昼堂々と垣根を越えて人のうちに入ってくる傍若無人ぶり。いくら小金もっていようが、どれだけ西欧流の価値観を共有していようが（欧米の連中は日本人など真の仲間だとは思ってない）、分に応じた physical な意味での実力をもっていないと脅迫どころか暴力の行使を実際に受けたとて、為すところがないということだろう。もうそろそろ日本人も目を醒まさないで、51 番目の州にして頂く前に本当に倭人自治区にされてしまう。嗤ったのは、こちらのニュースで、警備艦艇 6 隻が同時に領海侵犯したのに対して、日本の野田首相は必要なあらゆる手段を行使すると言った、と報じられていたこと。これ英語になると、実力行使を含めてあらゆる可能性を排除しないとの意味に受け取られ、やけに勇ましく聞こえるのだ。当の発言者や政府筋の真意、大方の日本人の諒解とは、少なくともニュアンスは異なるものだろう。まあもつとも、そんなこと言ったって猛り立っている強盗には通じないでしょうけど。

聴くところによると満州事変が起きた 9 月 18 日を期して、もっと大規模なデモがあるという。暴徒が日本人狩りをしているとも伝えられている。まともな国でないことはハナから承知だが、これはもう正気の沙汰とは思えない。キチガイである。当地では、CNN を含めイスラム圏の反米反欧デモがアメリカやオーストラリアに飛び火したことは大々的に伝えられているが、数日前の領海侵犯の報道ほどには反日デモ（同じようにアメリカに飛び火したようだけれど）のニュースはあまり大きく扱われていない。彼らにとってイスラム圏の民衆にある抜きがたい反欧米観なり反グローバリズムはまことに荷厄介だろう。公序良俗に反しない限り、表現の自由が保証された社会の中で市井のたれかが何を作ろうと、その国や政府はいちいち責任など負ってられないし、その必要もないのだが、近代的デモクラシーを真に理解しない人々には、先ずそのことが通じない。彼らの西欧世界に向けられた敵意が、ここ数十年のアメリカの多分に手前勝手な介入に腹を立ててのことだけなら判らぬでもないが、オスマン帝国崩壊以降の西欧世界（主として英国とアメリカ）の得手勝手なやり方が今日のイスラム圏の混迷（王政や独裁制の不条理や貧困（正確には貧富の差か）の因になったと尻を持ち込まれても、正直、困惑以外の何物でもないだろう。歴史を俯瞰すればそう考える向きもあろうし、感情的にはわからぬ訳でもないが、その苦情を今さらいまの西欧世界に申し立ててもしょうがないし、言ってしまえば大いなる筋違いなのだ）と云うことが、もの知らぬ連中には理解できない。中国の、そして韓国の反日の構造も同様だ。中国民衆の反日観は、放っておくとどこまで増殖するか判らぬ体制への不満のはけ口として、韓国以上に意図的に作られ、利用されてきたわけだが、そのことをどれだ

けの人々が理解しているのだろう。当方としては、中南海の連中（中国共産党の特権的指導層の意味）が反日強硬外交と国内ガス抜きの一石二鳥と思っていた反日扇動が仕舞いに制御不能になって、火遊び過ぎて自ら火事出す如く、あやうい内外二面作戦が内側から瓦解することを期待するしかない。アメリカならそうならしめるような権謀をあれこれ巡らすだろうが、日本の政府筋にそんな深慮も度胸もなかろう。今日観る反米と反日に通底する部分があり、対処するうえでどんな術策が取り得るのかを単に表層的な政治手段に留まらず、地政学、歴史に立ち戻って立体的に考える要があり、少なくともその意味で両者協力して考えてみる価値はあるのだが、お寒いけれど日本の当局筋にはそんな発想もないでしょう。繰り返すが、一般にはこちらにおける中国の反日デモへの関心は高くなく、その筋の人でない限り、イスラム圏の反欧米運動と対応付けて考えてみようなどと云う発想はない。アメリカも欧州も直ぐ隣にイスラム諸国があるわけではないこと、石油利権はあるにしろ騒ぎの起きている国が中国のように経済的に無視できないプレーヤになりつつあるわけではない点で日本の抱えている厄介さからするとずっとマシである。本当に現下の日本は厄介な隣人たちをもったものだと嗟嘆する。

ここオランダの歴史における厄介な隣人といえどこか？

ドイツもそうだろうが、なんていったって英国ってことになる。隣人にして親戚だと云う点で、はなしもややこしい。

17世紀に三度、そして18世紀に一度、英蘭は干戈を交えている。英蘭戦争である。17世紀はレンブラント、ロイスダール、フェルメール（もっとも彼はレンブラントやロイスダールと異なり生前は無名だった——その点、この国が生んだもう一人の天才画家ゴッホに似ている）を上げるまでもなくオランダ絵画の黄金時代であった。肖像画だけでなく、風景画など広い意味での風俗画により、職業としての画業が成立していたことは、王侯貴族がパトロンとして芸術を振興するのではなく、ブルジョアによる市民社会がいち早く成立していたこと抜きには考えられない。オランダは総督という名の世襲王家を推戴する君主国ではあったが、実質的に国の運営を担っていたのはレヘント諸公（各州の首長をペンシヨナリーと言った——ペンシヨンの鍵の与り人——国から雇われで管理をまかされている人ほどの意味——国家の官吏を公僕と呼ぶ発想はアングロサクソンの政治思想の産物である）とよばれた都市の裕福なブルジョア商人たちであり、近代に先駆けた民主主義の国、市民社会の国であった。

スペインからの独立が正式に承認される1648年のウェストファリア条約から、わずか4年後に第一次英蘭戦争が始まる。

不思議といえば不思議だ。先に述べたが、スペインからの独立戦争では、同じ新教国として英国は陰に陽にオランダを援助している。積極的にオランダに手をさしのべるに当たってはエリザベス女王（一世；在位1558-1603年）の意向が大きく影響した。オランダは主

要都市の主権と引き替えに英国の同盟を要請したから、英国側にその気と強引さがあれば英蘭両国は統合されていたかも知れない。両国の呼称も **England** と **Netherland**。言ってしまうと地域名称であり、**Scotland** との統合も後年のことであるから(1707年の合同法による)、歴史の if で **England** と **Netherland** が同じ新教国として今日ある UK のような連合王国になっ
ていても何の不思議もないのだ。長い独立戦争の間、消耗戦に耐えきれなくなって、やがてスペインの衰退が明らかになる。戦いの後半期にはオランダの独立は既成事実化する。この地域に平和が戻ると、オランダは著しい勢いで成長しはじめる。もともと教育水準が高く、いつ大水が押し寄せてくるかもしれぬ過酷な自然環境とスペインの酷薄な支配とが強固なコミュニティ意識と忍耐の国民性とを醸成し、近代的な意味でのデモクラシーを生んだ。このことが驚異的な経済成長を後押しする。政治的なスペインの頹勢は、海運業でのオランダ成長のまたとない機会となった。海運業は造船業を育成し、テクノロジーの水準を押し上げる。金融保険業は欧州世界——即ち全世界のハブとなり、アムステルダムは世界中の富の集積地の観を呈するようになる。17世紀前半は明らかにオランダの世紀であった。英蘭戦争という蹉跌がなければ、パックス・ブリタニカでなく、パックス・ダッチによりモダニズムが牽引されていたかも知れない。

ときに、つかぬ事を言うが、英語の語彙で **Dutch** というとロクな意味がないことをご存じだろうか。有名どころでは、割り勘——**Dutch treat** や **Dutch roll**、**Dutch wife**、**Dutch uncle** (自分勝手なおじさん=著者のことなり)、**Dutch headache** (二日酔い)、**double-Dutch** (ちんぷんかんぷん)、傑作などころでは **Dutch fuck**——人にたばこの火を借りること——すぐ終わって(俺のことか?) 金がかからない(?) ことから派生…あたりに残っている。隣近所の悪口を言う語彙はどの欧州語にもあって、英語では他にも **Scottish** といえばケチ、**French** といえばエロ、**Polish** といえばバカ、**Greek** といえば絶倫、**Russian** といえばアル中との意味があるのだが、ここまでコケにされているのはオランダ以外ない。要するに、**Dutch** というとカネにコスイというのか、いぎたないというのか、兎に角、金銭に関して抜け目ないとか、まともでないモノ、イカモノとの意味をふくむ。蓋し、この頃の英国人の対オランダ人観が基底にあって大量に英語語彙に入ってきたのだろう。数え方にもよるが 200 はあるというから驚く。

たしかにオランダ人は抜け目なかった。

例えば、独立戦争の最中 1621 年、スペインに対して共闘してくれているフランスの、その反政府反乱軍に大砲やら銃器を売り飛ばそうとしていたオランダ商船がフランス政府軍に拿捕される事件があったが、似たようなことがいくらでもあった。英国もフランスも、現下共通の敵、それどころかオランダにとってはのるかそるかの独立戦争の相手であるスペインに対して、平気で武器弾薬を売り渡すオランダ人の無節操さに半ば呆れ、怒りを深くすることが一再でなかった。手段を選ばず、そんなことまでやって掻き集めたカネじゃねえか——英国にしてみると、ついこの間まで、自分たちが手をさしのべなかつたら、どちらに転ぶかわからなかったギリギリの独立戦争をやっていた「海の乞食」連中が、気が

付いてみれば金満家になって、自分たちより遙かにいい暮らしをしている（当時のオランダ都市は世界一美しいとされた）——ニシンを追って連中は俺たちのすぐ庭先でもって大量の水揚げをさらっていく（漁業はオランダの主要産業の一つであった——そして北海からドーバー海峡に魚を追って網を入れに来やって来た）——とんでもない奴らだということになる（このあたり 90 年代のアメリカにおける Japan bashing——日本叩きのメンタリティに似ている）。同根同族であればこそその近親憎悪の情もあるのかも知れない。やつらを懲らしめてやろうとの世論になるのにそう時間はかからなかった。無論、いかな当時のこととはいえ、一足飛びに戦争とはならない。まずは保護貿易政策によりオランダを経済封鎖しようとする。オランダの海運業および中継貿易を排除するために施行されたクロムウェルの航海条例（1651 年）である。これは当事者のイングランドや隣邦スコットランドにも大いに痛手で、オランダ船舶を閉め出すことでイングランドからアイルランド、アイスランドなど北方航路の物流が麻痺することになる。しかし、オランダにはもっと大きな痛手で、経済的には致命的大打撃となった。

英国にオランダをねらい打ちしたあからさまな保護貿易政策を採られ、当のオランダはどうしたか。

オランダは独立戦争での奮戦は別儀として、基本的には専守防衛の非軍事ステートを国是としていた。よって、あくまで軍事衝突に発展しないことを望んだ。これは必ずしも彼らがヒューマンイズムの徒であり平和主義者であったからとの朝日岩波が喜びそうな単純な理由に帰すことはできない。深刻な国内政治の事情がそうさせたのである。当時の国内政治状況を丸めて云うと、レヘントとよばれる都市ブルジョアと総督家であるオラニエ家つまり王家との綱引きにより危うい政治均衡が保たれていた。独立戦争という国難の中から、ウィリアム一世という救国の英雄が現れ、最終的には独立を勝ち取る。が、都市ブルジョアたちには、総督家が世襲君主化し、例えば隣国フランスのような強力な中央集権的絶対王政の君主国になることへの警戒感がつねにあった。英国からの難癖に対して、庶人にとって統合の象徴でもあった総督家を担ぎ出して挙国一致して断固この国難を乗り越える……敢えて一戦も辞せずとの政治的リーダーシップが発揮されれば、英蘭戦争はあるいは別の展開になっていたろう。しかし、軍事を前面に押し出すことは、総督家を担ぐことを意味し、それは国家権力の集権化に向かい、ひいては彼ら都市ブルジョア層との利害角逐を生まざるおかない（かつてあった、自衛隊の海外派兵は軍事国家への第一歩との論に似ている）……それは彼らのビジネス至上主義に反する事態をまねくだろう。平たく言えば、彼らには目先の商売の方が国家の浮沈よりも重大事案であったのだ——目先の愉楽の方が国家の浮沈より重大事案である現下の日本人のように（今の人に先憂後楽なんて通じません）。あくまで戦争回避を目指すならば、あれこれ難癖を付けてくる英国の挑発には乗らずに、外交でもって切り抜けるとの方策も採り得たかも知れない。が、不幸なことに、そこまで老練で賢い政治指導者をもたなかった（これまた今の日本に同じ）。それに武力の裏付けのない外交にはおのずと限界があるから（この言明は現在の国際社会でも通用する——そし

てこのことは今の日本にとってもっともよい教訓である)、そもそも戦争回避はあり得なかったのかも知れない。

結局、しかとした戦備も戦意もないままに戦争に突入したオランダは、英国に一敗地に塗（[ルビ] まみ）れる。北海漁業での水揚げはなくなり、シーレーン輸送は完全に破綻、食料価格は暴騰し、銀行は倒産、東インド会社の株は大暴落し、多くの庶人が飢えに曝された。この一連の社会的混乱の中で、流行画家として産をなしていたレンブラントも破産の憂き目に遭ったという。栄華を誇った市街は荒廃し、巷には不労者が溢れかえり、盗人が跳梁跋扈した。

講和の交渉相手は護国卿クロムウェルである。オランダ憎しの声が喧（[ルビ] かまびす）しい議会と異なり、彼は、内政的には理想主義的ピューリタン国家の構築を、外交的には新教国の大連合、大連邦を夢想していたので、敗者オランダに対して寛大であった。寛大のあまり、かれは英国人とオランダ人は完全に平等な条件の下で一つの主権下で連合共和国を形成してはどうかとの驚くべき提案まで為している。この突飛な提案はオランダ側の受け入れるところとならなかったが、1654年に成立したウエストミンスター講和条約は、オランダにとって幸いなことにえらく大甘なものであった。このお陰を蒙って、第一次英蘭戦争からオランダは比較的早く復興することができる。

しかし、英国側からのオランダ叩き、オランダいじめは、その後一層エスカレートし、複次にわたる英蘭戦争を惹起する。一度、腰抜けと見透かされれば、相手がかさにかかってくるのは、個々の人間関係でも外交でも同じだ（これもまた現下の日本にはよい教訓だろう）。北米にあったオランダ植民地はすべて英国に奪取され、ニューアムステルダムはニューヨークに改称される（この次第もあってニューヨークにはオランダ系住民——つまりオランダ系アメリカ人が多く住んでいた——19世紀に活躍する掌編小説の名手O・ヘンリーの短編に描写されるニューヨークでは「ニッカポーカーズ」とのオランダ系住民への蔑称が使われていた）。

こうして一時期黄金時代を画したオランダは没落する。

以上のくぐり、現下の中国が日本に仕掛ける難癖、将来もっとエスカレートして行くであろう両国間の摩擦に対して私たちがどうすればいいかを考える上で幾つかの教訓を含んでいるように思われる。

さて、その後のオランダだが、英仏と新たに台頭してきた独逸プロシアあるいはオーストリア、ロシアといった欧州勢力図のメインプレーヤーである大国としてではない自らの存在位置に自足して生きていくことになる。オランダの執っていた栄えある位置を占め、モダニズムの扉を開き、その勢いに乗って世界覇権を成し遂げるのは、いわずもがな、英国である。世界経済の中心がアムステルダムからロンドンに移ったのは言うまでもない。

追記

本日朝のCNNは反日デモを北京と東京の特派員報告を交えて詳しく伝えていた。アトラ

ンタにいるアンカー役からこの騒動はどうすれば沈静化するかと振られた北京特派員は、中国側としては日本政府の地権買い取りを取り下げる、つまり日本側が全面的に譲歩する以外ないと考えていると言っていた。東京特派員は、中国が言い出した経済制裁で日本経済は非常に大きな打撃を受けるだろう。実際、祭日明けの東京株式市場は大きな下げから始まっており、震災、円高で唯でさえ立ち直りを見せていない日本経済に、今次の中国がほのめかす経済制裁は、タイの洪水で生産のサプライサイドが大きな打撃を受けた事態以上の深刻な影響を日本経済にもたらすだろうとレポートしていた。この特派員氏、尖閣の主権に関して、中国側は天然ガスが発見されて以降の1970年代になって主張し始めたと正確な事実を伝えていたが、なべて日本側が主張することは、中国側のそれに比べて伝えられるところ少なく、全体の印象としては、日本に分がないようにみえた。この事案に関しては歴史的にも法的にもどうみたって日本に正統性があり、南沙諸島の主権をめぐってフィリピン、ベトナム、マレーシアと係争になっているのと同様、中国が謀っている近隣域へ覇権的な膨張政策の一環であること、かつ歴史カードと絡めて反日を煽ることで国内の不満分子のガス抜きに利用していること等々の踏み込んだ解説はされていない。自分の信する（おまけに法的、道義的正統性に照らしても何も臆するところのない）ことをきちんと主張しないことがここでも後手に出ている格好だ。いまだに、本当のことを主張すると、一層事態を紛糾させるとの事なかれ主義にとらわれているのだろうが、もう事がここまで大きくなってしまっているのに、荒立ててはならないもクソもないのである。一番情けないのは、きちんと己の主張を開陳すること（これは単に政府筋が通り一遍のリリースをするのでなく、大いにメディアを通じて主張し、事実を知らされていない中国の一般の人々に向けてメッセージを送るとの意味もある）もせず、最後は経済により死命を制せられ（と考へ）、背に腹は替えられないと自分うちに納得を説いて、申し訳ありませんでした、取り消します、となること。たとえ経済が大きな影響を被るとしても、奴隷ではない、独立した人格と誇りを持つ人間ならば、ないがしろに出来ない大切なものがある筈だが、もし斯様の手打ちをすることになるなら、戦後主義で荒廃した日本人の精神にとどめの一撃を加えることになるだろう（もうそうになったら、あの人たちが言うように、小日本など滅んでしまった方がいいのかも知れない）。表層だけを掬うメディアは兎も角として、世界中の良識と良心のある人士は、日本人の性根がどこにあるのかを観ているのである。私たちに覚悟はあるのだろうか。

(Sep.18.2012)

いよいよ最終稿になりました。前回の『入豪求法巡礼行紀』もそうですが、これら書き散らしは私の学生たちを主な読者にしたものです。ご懇篤にも何通か礼状を頂きましたけれど、彼らからは無論なんの反応もありません。連中のどれくらいが読んでくれているの

か、怪しいモノだと観ております。読者十人説だったか、山本夏彦翁はそんなこと言っていましたっけ。さしずめ私の場合にはまじめに読んでいる者が一人もいれば、よしとしなければならぬのかもしれませんが。まあ、鼻眞目に観ても、いるかいなかったところでしょう。またぞろ迷惑メールが来ているぜ、と着信即ゴミ箱入りしているのかもしれませんが。折角、ひと夏はね伸ばせたのに、また小うるさい舅じじいが帰ってくるぜと噂していることでしょう。家人などは、あなたがいなくなって皆祝杯上げていることでしょう…気持ちわかるものなどけしからんことをぬかします。

このたびは、途中に一時帰国が入るキセル滞在でしたけれど、それでもふた月、こうして余所で暮らしていれば、明日はこの地を去ろうと云う暮夜、過ごした日々のあれこれと些かの感傷とが止めどなく湧き上がってまいります。このこと、一昨年、豪州と同様であります。この国で暮らすのはこれで二度目。不思議な縁（[ルビ] えにし）を感じながら、一日一刻をいとおしむように過ごしてまいりました。もう外にフラフラ出掛けることも許されなくなるでありますから。

さてさて、最後は何でオチを付けるか。蓋し、一部の読者には関心があるやも知れませんが。

己のもっとも書きたかったことを吐き出せばよい、と灯りを消したたれもない部屋で、声ならぬ声を先程来聴いております。

水戸黄門の印籠に遠山の金さんの桜吹雪…やはり最後にはお決まりのアレがないと示しがつきません。物事にはきまりってモノがあるんです。

それで私は何を書くか——もう申し上げるまでもありますまい。そう、そうです——恋愛小説。

Transference 夏の欧州—冬の湘南—そしてまた夏の欧州にて（創作）

重い杉扉を押し開けて這入（[ルビ] はい）ると中は晦（[ルビ] くら）かった。皓々とした陽の中を歩いてきたからか、瞬息、目眩を感じて足が縛れた。しばらくその場で佇立していると、やがて目が馴れてきた。先ほど感じた堂内の晦さにも微妙な強弱があることに気がついた。

尖塔を支える穹窿（[ルビ] ヴォールト）の側壁に窓飾（[ルビ] トレサリー）が施された灯り採りが切ってあって、そこから乳白色の陽光が滲み出すと、聖壇の辺りに薄ぼやけたスポットを落としている。私は自らを無神論者（[ルビ] エイシエスト）だと思っているが、原初の泰西人たちがこうして天上から差し込む一条の光に神の降臨を感じたとしてもそれは無理からぬことだったろうと今なら諒解出来るように思う。

噴き出た汗がひいていくのが判った。

旧知のノルウェー人教授と会議の中日の所在なさをどうして過ごすか話していると、彼

は私の北方〔ルビ〕ネーデルランド〕絵画好きをよく記憶していて、ここへ来ることを強く薦めてくれた。会議が行われている都市から少し遠いと思ったが、アメリカ生活の長かった彼は、車を借りてフリーウェイにのれば、片道二時間でつくだろうとこともなげに言った。私は彼の言った祭壇画を十年前、偶々〔ルビ〕たまたま）、逗留先の紐育〔ルビ〕ニューヨーク）で観たことがある。作者はテンペラに代わって油彩技法をはじめて使い始めたとされる画家として著名だった。フランドル派の具象画からすると構図は寧ろ稚拙な感じがする絵だが、そのときの私はロマネスクとゴシックが折衷された大聖堂の重厚な壁に収まっている確かな容〔ルビ〕かたち）を観てみたいと願ったのだった。

人影は疎らだった。

ゆっくりと歩を進めると洋棋盤〔ルビ〕チェスボード）模様をなした大理石の床を叩く乾いた音が響いた。

入口脇の壁の左側には黒檀で額装されたキリスト昇天図が、右側にはキリストの洗礼が描かれていた。長堂から内陣を分けているバジリカが高く聳えている身廊へ歩いていくと、突如、床の所々に陽の斑模様が落ちる遠近透視〔ルビ〕パースペクティブ）が拓けた。視線の先は聖壇に通じる袖廊に交叉する筈だが、乳白色の陽で霞んだ光の珠が見えるだけでよくわからない。輪郭のぼやけた光彩の中心に消失する側廊には、黒い人影が小さくたむろしているようだ。金欄と真紅のバロック装飾が施された祭壇の一つで、丁度、弥撒〔ルビ〕ミサ）が執り行われているらしかった。先程から堂宇の空気を低く震わせているのは、どうやら彼らが口々に何かを誦しているせいらしかった。身廊右手の高見にはたれもない説教壇が、左の壁には鈍く光を放つオルガンの金筒があって、耶蘇僧〔ルビ〕ファーザー）の説教に頭〔ルビ〕こうべ）を垂れる会衆を静かに見下ろしていた。

彼らの横を通り抜けるとき、何げに垣間見た少女の頬が、薄紅をさしたように仄かに紅潮していくのがわかった。金色〔ルビ〕こんじき）の髪と対蹠をなす色彩の形式美に何かを視ようとしていたのか。そして、それが私の脳裏に深く刻印されたのはなぜだったのだろう。一瞬の変化〔ルビ〕へんげ）に何かの奇蹟を感じたからなのか。私はその情景をその後、反芻するたびに考えてみるのだが、畢竟〔ルビ〕ひっきょう）ずるによくわからなかった。

内陣の最奥部にしつらえた聖壇は幾重もの裳裾をなした階〔ルビ〕きざはし）の上にあった。そこは神の光被を信ずる者にとって大いなる意義を有する場所には違いなかったが、私には唯ただ眩し過ぎて、とても直視に耐えぬ処でしかなかった。そして、聖壇裏の壁に下階の墓室へと通じる階段が晦い闇を呑んだように口をあけているのを発見したとき、私はその落差の激しさに小さな感動を覚えたのだった。壁に埋め込まれた墓碑板は鈍い褐色に朽ちかけていたが、ラテン語で綴られた聖人〔ルビ〕セイント）の名前を何とか読みとることが出来た。私は所々緑青〔ルビ〕ろくしょう）が浮き出た墓碑板を愛おしむようにそっと撫でてみた。

聖壇裏を取り囲む周歩廊は薄暗く、そこに面する放射状に配された祭室には、闇溜まっ

たような区画が次から次へと整然と続いていた。そのいくつ目かの小室に蠟燭が灯されているのを見つけたとき、私の歩みはそこで止まった。

そこには祭壇画を前に祈祷書を手にした全身黒衣の男が額（[ルビ] むか）ずいていたのだった。男は一心不乱に祈りを捧げていた。

冥界に下るキリストを描いた祭壇画には、灯明（[ルビ] ほあ）かりに映し出された男の影が揺らめいていた。男は豊かな口顎髭をたくわえ、その下の口が絶えず動いている。詩編を唱える男は誦珠（[ルビ] ロザリオ）を首から掛け、祈祷の最中とみえた。私は何ものに憑かれたような男のただならぬ様子に身の裡から沸と湧き上がってくる感動をおぼえ、ひどく搏（[ルビ] う）たれていたのだった。

私は、列柱の袖から凝（[ルビ] じ）っと彼の挙措を見つめていた。

終着に近づいたことを知らせるアナウンスに目醒めると、電車は駅へのアプローチをのろのろと進んでいた。車内の人影は既に疎らで、幾人かの通勤客は立ち上がって扉の前へと気怠そうに移動し始めていた。眠りに落ちる前、虚ろに眺めていた雑然とした都会の車窓風景が、すっかり闇に落ちた寒景に変わり果てているのに、私は小さな驚きを禁じ得なかった。時計を見るとあれから二時間と経っていないのだ。冬日夕まぐれの一刻は、眠りを貪っていた私だけを置き去りにして、西方のどこかへ痕跡を留めることなく、失せてしまったらしい。

ホームに降りると、白く霞みを伴った冷気が足の裏からじわりと這い上がってきた。たれもいなくなったホームを照らす青白い蛍光灯は、断末魔の病人の喘ぎのように不規則な明滅を繰り返していた。

木造の駅舎を後にすると、申し訳ばかりの駅前ロータリーに客待ちのタクシーが一台だけ小さく蹲（[ルビ] うずくま）っていた。

シートに身を沈め、行き先を告げると、車は音もなく静かに滑り出した。

しばらく寂れた繁華街を走ると、すぐに灯火も疎らな闇の中に包まれた。

幾つか緩慢な坂を上下すると、橙色のネオンが毒々しげに輝いた一郭になった。巨大な箱状の建物がゆっくりと後方に流れてゆく。黒鉄の門扉の前を過ぎるとき、車は小さなカーブに歩調を合わせるようにスピードを落とした。電力会社の変電所の大袈裟な表札が、闇の中でスポットを浴びたように孤然（[ルビ] ぼつり）と映し出されていた。やがて路は九十九折（[ルビ] つづらおり）の急勾配になった。曲部（[ルビ] カーブ）の溜まりに来ると、車は路上の鉄錨を跨いで走った。そのたび、私の背中には低い振動が伝わってきた。

坂を上りきると、何の前触れもなく眼前の風景が拓けた。相模湾をなぞったネオンが小さく散りばめられている。江ノ島へと通じる国道の筈だ。海との境界を為すその緩やかな曲線の向こう側には喩えようもなく深く黒い闇が広がっていた。黒洞々たる海と虚空の闇との区別はつかない。

断崖に刻みつけられた路を辿り、最後に切り通しに穿たれた小さな隧道（[ルビ] トンネ

ル) をくぐると、やがて右手の丘上にその建物が見えてきたのだった。

車寄せに降り立つと、小さな罅割れが無数にはしっている壁に目がいった。白い塗装は所々剥げ落ち、無惨な染みが浮き出していた。玄関に入るが、すっかり灯りの落とされた館内はおよそ人の気配がせず、私の行き足はそこで止まった。

玄関脇の壁に小さな木枠を詰め込んだ小窓があって、カーテンの隙間から灯りが漏れていた。こつこつと小窓を叩くと、しばらくして埃で薄汚れたカーテンが手荒に開けられた。

中から貌が覗いていた。私が来意を告げると、男は小窓のガラス戸を開けた。小窓を開けると同時に、中からテレビの笑い声が勢いよく飛び出してきた。男は、患者の名前は、と横柄に訊いた。彼の背景には、小上がりに敷かれた古畳と赤いセルで出来たテレビが見えた。チャンネルの付いたテレビは色の調子が外れていて、画面にはお笑い芸人の姿が歪んで映っていた。石油ストーブに掛けられた薬缶の口からはひっきりなしに白い蒸気が吐き出されていた。よれよれながら白衣を着ているところを見ると男は宿直医なのだろうか。それともこう云う病院では守衛もたれもかれも職員の皆が白衣を纏っているのだろうか。

男に訊いた病棟を目指して、私は薄暗く長い廊下を歩いていった。行き止まりの鉄扉を押し開け、再び外に出ると、朽ちたような木造屋根を架けた渡り廊下があった。裸電球に照らされたその廊下は坂の上へと一筋に伸び、その先は闇の中で消失していた。潮の香りがする風が強かった。遠くで小さく灯火が揺れているのは、深い闇の中で建物がひっそり息づいているからに相違ない。私は坂の上を見上げながら、暫しのあいだ風に煽られて揺れる電球を眺めていた。

廊下を脇目に、向かいの建物へと這入（[ルビ] はい）る。教えられたように階段を上がると、そこが目指す病棟だった。

緑色のリノリウム床は大きく波を打ったようにうねっていた。長い廊下は、青白い蛍光灯で皓々としていた。患者たちに一切の秘匿を禁じるかのように。左右の区画に整然と病室が続くさまは、田舎の廃校を彷彿とさせた。と同時にどこかで私は監獄の様子を想起していたと思う。途中の一室にはナースステーションと表札が掲げられていたが、粗末な小部屋の名称にはおよそ不釣り合いで一抹の滑稽さを禁じ得なかった。大正ガラスの凹凸の向こうには、ストーブを挟んで表情の鈍そうな若い看護婦と歳のいった草臥（[ルビ] くだび）れた感じの医者がぼそぼそと何か話し込んでいた。

廊下の向こうから寝間着姿の男が近づいて来、ゆっくり歩く私と対向すると、やがて直ぐ横を通り過ぎていった。その刹那みた男の横貌には、どす黒い直面（[ルビ] ひためん）に深い皺が刻まれていたのだが、目だけが異様に鋭く、あらぬ虚空の一点を睨み付けるようにしていた。どこかに狂気が宿っている目だとわかった。

行き止まり近くになって、私は部屋の表札によくその名前を見つけた。

部屋は暖房が効いていた。

寝台の周囲には白いカーテンが巡っていたが、窓際の区画だけ開け放たれていて、そこから話し声が漏れ出していた。

人の気配に気がついた背中がゆっくりと振り返った。

部屋への闖入者が私であることを理解するのに随分と間があった。

「…どうしてここへ」

それだけ言うと、涙が噴き出した貌は小さくなって、あとは声にならなかった。

泣かない、泣かない…声のする方を振り返ると、それまで話相手をしていただけの五十格好の女が、向かいの寝台から微笑を湛えた顔でこちらを覗いていた。…ちゃん、元気でやっていますよ——どうやら私を彼女の夫と誤解しているようだ。——お世話になっています、と不格好に頭を下げると、今日はこの部屋私たち二人だけだから、丁度よかった…積もる話もあるでしょう——そう言いながら、身を翻すと廊下へ出て行ってしまった。私は女の背中を追いつつ、廊下の明るさに比べ、六人部屋の室内がやけに暗いことに、そのときになって気がついたのだった。

彼女は、粗末な丸椅子を引き寄せ、無言のまま私にそこに座るように促すと、自分は薄桃色のカーデガンを羽織ると寝台の上に座った。

同室の人はよかったのだろうか、と呟く私の言葉の先を読んだように、

「ここは開放病棟だから…」

とだけ短く応えた。——斜面の上には鉄格子が嵌った病棟があって、そこに較べたらよほど自由だから、と彼女は言葉少なに語った。することのない日中は海沿いの路を散歩するのが日課になっている、と短く一語一語区伐るような言葉で付け加えると、あとは小さく破顔（[ルビ] わら）って口を噤んだ。私は、彼女が間をおいて訥々と喋る一別以来の顛末に脈絡の乱れを感じた。喋るうちに気分が高揚してくるのか、声が時々裏返ったかと思うと、口の渇きのせいで今度はかすれたりした。薬のせいだったのかも知れない。私は時々頷きながらただ黙って話を聴いていた。

ひとしきり話し続けていた彼女は、不意に小さくため息をついて黙り込んだ。見る間に涙を溢れさせ、厚いカーテンが引かれた窓の方を見遣った。窓下の暖房の吹き出しから盛んに吐き出される温風がカーテンの裾を揺らしていた。

「ここからの眺めはとってもいいんだよ」

横顔が呟いた。私はそこに若い頃の彼女の澁刺とした才気と深い美貌を必死に探し求めていたのだと思う。

「先週まで居た部屋は山側だったの…。窓から見えるのは暗くて鬱蒼とした竹林だった。こっちに移って来て、急に目の前が拓けたように明るくなってね」

「昼のいつとき、ここからこうして外を眺めていると、海がきらきらと眩しくて。そのうち、白い光が目になくなってくるの…それで目を逸らしちゃうんだよ。最後までみていることが出来ないの」

彼女の言う「最後」の意味は不分明だったが、その言葉に何かしらの屈託を滲ませていることだけは感じ取ることが出来た。

「そのとき判ったのよ…」

「何がわかったんだい？」

私は陰影の深い横顔に訊き返した。

「わたし…いつだって、何だって、途中で投げ出して、逃げてきたんだって。自分では、傷つきそうな場所を避けて、うまく通り抜けてきたつもりでいたけれど、本当はもっと深いところで冷たい火傷をおっていたんだって」

「あのとき…あのとき、わたし、あなたにもっと別のことを頼めばよかったのよ」

一点を見つめながら暫く言葉を探すようにしていた彼女は、

「…でも、気がつくのが遅すぎたわ」

絞り出すように言うと、あとは頭を振って静かにうなだれた。涙のしずくが白いシーツに染みを作った。私は掛けるべき言葉を失い、無言のまま肩に羽織った薄桃色のカーデガンを直してやった。花車（[ルビ] きゃしゃ）な肩だった。あのときの別れ際、目が醒めるように肩を揺すってちょうだいと言われ、はじめて彼女の体に手をかけたときと同じ温もりが手に残った。

その時の私は彼女の哀しみを理解する資格に欠けていたのかも知れない。

また、来るよ——と言う私に彼女は、涙を拭って、もう来ないでちょうだい、と折りとるように言った。

それは彼女の決然とした何かの表意と観えたが、私は敢えてそれを不穏なものとは取らずに、旬日を経ずして病気を治すからここで再会することはない、との意味に解釈しようとした。過去幾多の彼女との関わりの中では、一寸した行き違いで互いに棘を植え合うようなこともあったけれど、そんな折りでも最後にはお互いの言葉うちに互いが再び寄せ合う結び目を見つけては、互いの諒解のもと、そのつど安堵を縊り戻してきたのだった。そして、それらの過去とは明らかに異なっていた筈のその夜も、私はあの頃と同じ感覚に必死に縊ろうとしていたのだった。そんな偽りの点を打つことで締め括ってしまった彼女との邂逅は、今にがい悔恨とともに思い返すあの昔日の結末と何ほど違うことがあったろうか——畢竟（[ルビ] ひっきょう）、今さら嘆いたとて詮のない始末なのであった。

——それが彼女に逢った最後の夜になった。

黒衣の男は祈祷を終えると静かに振り返った。私の視線に出会うと彼は謙抑な微笑を返して寄越した。

私は不躰にためらいながらも訊かざるを得なかったのだ。

祈りによって、天上に召された愛する者と再び繋がる事が出来るか否かは、残された生者の裡にこそ在る——厳かに呟くと男は胸前で小さく十字を切った。

——生とは幕間のエピソードのようなものだ。そして、いかな愛する者の死であっても生きる人にとっては、他者の死はあくまで他人の死であり、いずれは何かしらの折り合いをつけて過去に繰り入れて行くしか他に方途がないものである——男の言葉だったような気もするし、わたし裡の誓願を空耳が聴いただけだったのかも知れない。

一筋の光が、突如、天上から降ってきたのは、そのときのことだった。あえかな光だった。

それが私の唯一感得した神の影向（[ルビ] よごう）の刹那だったと気がついたのは随分と年月を経た後のことである。

そのとき、確かに 私は縹渺（[ルビ] ひょうびょう）たる薄明に浮かぶ一片の慰謝を垣間視ていた。

Thou knowst 'tis common, all that live must die, passing through nature to eternity.

William Shakespeare "Hamlet" I.2

生あるもの死するは世のならい、現世を通して久遠の永劫におもむく。

ウィリアム・シェイクスピア「ハムレット」1幕2場

(Sep.24.2012)

跋

ひと夏の長い夢を見終わって、またこうして自室から筑紫野の緑野を眺めている。十月の声を聴くとさすがに日本も秋が深いという印象になる。既に陽射しには猛々しさは失われ、緑被にもひと頃のような横暴なまでの力の横溢をみない。そのあとに寒い冬が控えていることを知らせているからだろう。

一昨年の豪州に引き続いて今度のオランダでもそうだったが、私が海外に出ると、必ず猛暑の夏となるようで、かつ必ず国辱モノの対外摩擦が起きるとのおまげが付く。わたしにとっては日本及び日本人を外から見つめ直すに格好の機会なのだろうが、日本及び日本人にとっては愁いが深まるばかりである。もっとも、大半の人はどこ吹く風の太平楽だろうけれど。

毎週末には Eindhoven からベルギーにサイクリングに出掛けていた。国境までほんの二十キロ一吋である。国境と云って何があるわけでもない。道路に、ここからベルギーと素っ気ない標識があるだけで、日本の県境の方がまだしも気が利いている。こんな環境で暮らしていれば、国の違いが大きな意味を持たないとの発想になることは容易に想像がつく。その表層だけを掬い取って、自称、市民活動家、その実、サヨクのなれの果てが、地球市民たれなどと言い募るけれど、私たち日本人には身体的に理解の及ばない絵空事というのが実感だろう。実際、拐（[ルビ]）かどわ）かしをはたらく一方、粗悪な飛び道具（核弾頭付きミサイル？）の開発に余念なき悪党に、人のものを略取しておいて一向に悪びれないどころか、奪われた人を盗人呼ばわりする正真正銘の盗人、さらには強盗にはいることを高唱している確信犯のならず者等々に取り囲まれている私たちは誠に不幸である。

厄介なのは隣人たちばかりでなく、むしろ私たち自身の精神に戦後主義による深い頹廢が巣くっていることである。オランダの冷涼な夏にあつて、日本の猛暑もどこか人ごとではあつたけれど、原発を巡って、いまだ朝日岩波藤原書店の如き論を立てて言い争っている日本を観ては、猛暑もわらいごとでは済まされない。しかし、まだ、曲がりなりにも論争しているのは救いがあるくちかも知れない。若い連中は、原発節電関係ね一、竹島尖閣なんだそれ、と云い、播州赤穂四十七士（BAK47？）はしらぬが AKB48 なら追っかけやってるぜ、と無知とアパシーをむしろ誇っている。

この国は一体どこにゆくのだろう。

ながい長い夏期休暇は終わった。由なしごとに仮託した我が繰り言は仕舞いにしよう。まじめに考えると筆勢鈍るばかりなので。

我が学生たちよ。

わたしの希望はひとえに諸君諸嬢の向後の健闘に懸かっているのだ。私の残り持ち時間は君らのそれより短い。よろしく我が意を諒とし、一層の勉学に励まれんことを、切にせつに祈念する。

自律と自尊がもたらす精神の高みに立ち、己を厳しく鞭撻することで、真の知的エリートになって欲しい。そして、この国をなんとか立て直してくれ。

最後に今次の機会を提供してくれた **Netherlands Organization for Scientific Research** と日本学術振興会に衷心より感謝致します。

筑紫野をおおう秋の高雲を見上げながら、フェルメールの「デルフトの眺望」に描かれていた雲を思い出している。